

# 第 I 章

2014.4.1 - 2018.3.31

## 「復興・再生」への 町民協働



海・空・道が語りかける

「さあ、踏み出そう」と



# 1 目に見える「一歩」の始まりへ

平成26年度 2014.4.1-2015.3.31

## 全町避難4年目 — 「復興・再生」への胎動

すぐに戻れるものと家を出て、町を離れてから、あっという間に3年が過ぎた。この間、町民はそれぞれの避難の道筋をたどりながら必死に明日を模索し続けていた。避難生活はやや落ち着いてきたかの外観を呈したが、その内実は、それぞれが抱える千差万別の混乱と困難の中、生活の再建を自問自答し、置かれた状況の中でのさまざまな苦悩とたたかっていた。また、そのいたたまれなさから、思いを定め動き始めていた。

原発事故現場・放射能汚染の状況は、前年の台風などもからんで汚染水の流失が深刻となるなど「収束・安全」を言うにはほど遠く、帰還への大前提となる町内の本格除染も、この年1月に着手されたばかりだった。

こうした中、健気というべき子どもたちの姿が避難生活を耐える町民を元気づけた。とりわけ富岡高校バドミントン部の活躍は、東日本大震災被災の混乱のただ中の仙台から世界へと躍り出て活躍したフィギュアスケーター・羽生結弦選手の活躍(ロシアで開催されたソチ冬季オリンピックで金メダル=2014年2月14日)とあいまって、富岡町の被災者らの心を鼓舞し、励まし、ふるさと「富岡」への思いを繋ぎ、支え続けた。

「東日本大震災の発災から3年が過ぎました。福島県においては、今なお約13万5千人の方が避難されており、本町にあっては、町民が全国47都道府県での避難生活を強いられています。改めてこの長い避難生活の中で、様々なご苦勞をされている町民の皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

さて、昨年3月25日に警戒区域の解除と避難指示区域の見直しが行われましたが、その後も除染やインフラの復旧が遅々として進まない状況が続いておりました。しかし、見直しから1年を迎え、わずかながらも復興・復旧へ向けた足音が聞こえ始めました。



町内約40か所に設置された防犯カメラ

今年早々には、富岡川以南より本格除染が開始され、さらに上下水道につきましても、最も早い地区で今年10月までの復旧完了を目指し工事が進められております。また、今年2月には常磐自動車道広野IC-常磐富岡IC間が3年ぶりに再開通いたしました。これに併せて、町内約40か所の防犯カメラ設置など、町民の皆さまの安全・安心と利便性向上に向けた準備も現在進めております。これらは、故郷の本格復旧に向けた着実かつ大きな第一歩であると言えます。

しかしその一方で、東京電力福島第一原子力発電所では汚染水の流出などトラブルが相次ぎ、事故の収束



防犯カメラ運用開始のスイッチを押す宮本町長

### 富岡町 復興・再生のあゆみ

#### 2014(平成26)年度

- 4月 1日 「災害に係る住家の被害認定基準運用指針」運用緩和  
消費税が8%に  
県、復興公営住宅入居者募集開始
- 2日 東京電力に対し町から賠償問題など3項目を要望
- 11日 有害狩猟鳥獣捕獲隊に委託状
- 12日 広野町で「富岡町復興への集い2014」開催



- 17日 ・さくらサミット加盟自治体間の災害時相互応援協定締結  
・「シャープ富岡太陽光発電事業」の基本協定調印式
- 20日 富岡町消防団春季検閲を開催
- 22日 富岡町都市計画審議会開催
- 24日 町民と行政をつなぐ行政区長会を開催

- 5月 15日 「ふるさと生産組合(渡邊康男組合長)」が、同地区の水田で米の実証栽培による田植えを行った

- 6月 毛管地区に仮設焼却施設建設着工
- 30日 双葉地方町村会といわき市が、合同で首相官邸を訪れ、浜通り地方における医療体制の充実や宅地問題などについての要望書を提出

- 7月 富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームによる民間所有文化財救出開始

- 31日 県教委、県内小中高生平成25年度の体力・運動能力調査結果公表。大半の学年で低下が進行

- 8月 1日 富岡高校バドミントン部が全国高校総体で史上初の男女団体アベック優勝に輝く



- 町内44か所の防犯カメラ運用開始
- 7日 「富岡町子ども友情の集い」を開催(ビッグバレットふくしま)
- 8日 「特定廃棄物の埋立処分事業計画」に関する住民説明会を開催(8月14日、県内他6か所)
- 9日 第一回富岡町災害復興計画(第二次)検討委員会



町政懇談会で挨拶する宮本町長

には程遠い状況にあります。また、国においては、これまでの帰還政策から移住政策というものを掲げ、原子力損害賠償紛争審査会では、帰還困難区域に対する精神的損害や住宅等の確保等についての追加賠償方針を示したものの、他の二区域との賠償格差など、地域や住民の分断が危惧される新たな問題が生じております。」

前年7月に実施された富岡町長選挙で新たに復興の歩みを担うこととなった宮本皓一町長は、東日本大震災・原発事故避難から4年目を迎えるに際しての挨拶で現状をこう振り返った(広報とみおか 2014年4月号)。そして移住か帰還かの二者択一を迫る国の帰還政策に対して、その判断は時期尚早として「二者択一を迫るばかりでなく〈長期退避・将来帰還〉という選択肢を設け、町民は帰還できるようになるまで避難先に滞在し、故郷の復興・復旧にも関わりながら安心して生活できるよう法制度や施策を見直し、必要であれば新たに創設すること」と、国と世論に訴えていく、と決意を表明した。

これは、町長就任直後に実施された「富岡町住民意向調査(復興庁・県・町)」「富岡町子どもアンケート」、年が明けて県内外の避難先各地7会場

で避難町民個々の実態実情に接し、そのさまざまな声に耳を傾けることを重ねる中からつかみ取られた実感であり、やがて確信となった思いだった。目下、復興とは、まだまだ「町に何人帰るか」というような数の問題など語れる段階ではなく、3・11まで住んでいた場所に町民が安心して戻れるような状況をいかにつくるかだ。それまでは〈長期退避・将来帰還〉という「新たな選択肢」がどうしても必要であり、町の復興の見通しを開いていくための重要な前提となる、との認識だった。

町民の生活再建にとって大きな鍵を握る損害賠償は、2013年12月26日に「中間指針第4次追補(避難指示の長期化等に係る損害について)」が発表されたことで、一気に動き始めた。避難町民の生活再建のための賠償内容が、ようやく実態を反映したものとなったからだ。町民それぞれが具体的な手がかりをつかみ、先への見



富岡町役場郡山事務所

通しをつけはじめの大きなきっかけとなるものだった。しかし、精神的損害で大熊町・双葉町が町全域が対象とされたのに対し、富岡町では帰還困難区域だけが対象とされるなど地域・住民の分断が生じ、これまで続けてきた町内一律賠償の要望が叶えられたものとは言いがたかった。

そんな中、「荒廃家屋の解体」について4月1日から国による家屋解体の要件緩和(対象の拡大)が実現、半壊以上と認定された家屋を国の災害廃棄物処理事業で解体し、費用も負担されることとなった。この認定に際しては原発事故避難で長期間放置してきたことによる雨漏りやカビ、動物被害なども考慮し、認定時期についても「震災直後」ではなく「調査時点」と緩和された。この内容は、従来の認定基準が「実態に即していない」として国に改善を求め続けた町にとって、大きな前進となるものだった。日を追うごとに状態が悪くなり、町民の悩みでもあった町内の荒廃家屋の解体が進み、その後の除染などへ、目に見える復興の加速が期待されたからだ。

2014年が明けるとともに、避難町民からの問い合わせが殺到し始める。かつては連携協力しあっていた町民ながら、追い込まれた心境から厳しい言葉をぶつけてくることも頻発する。役場職員といえども同じ被災者なのだが、その立場上受けて耐えるしかなく、苦しい対応を強いられた。そんな様子を見て、国や県外自治体から派遣され業務を支援してくれていたスタッフの中には、一步距離を置いて対応できる自分の立場を生かして、問い合わせ電話への対応役を



富岡町  
復興・再生のあゆみ

2014(平成26)年度

8月 19日 富岡第一中学校が、第44回  
22日 全国中学校バドミントン大会において、女子団体優勝を含む大会4冠に輝く



20日 広島市北部で大規模土砂災害  
24日 第39回県消防操法大会 小型ポンプ操法の部 優勝  
末 公共下水道富岡浄化センター(仮設汚水処理施設)工事完了  
30日 県知事、除染廃棄物中間貯蔵施設受け入れを表明

9月 4日 富岡町敬老会(郡山市)  
11日 富岡町敬老会(いわき市)  
15日 国道6号 富岡一・双葉間(14.1km)の交通規制が解除に  
24日 原子力賠償審査会が町内の被害状況を視察  
25日 除染後の町内の農地保全や営業再開に向けた協議を開始  
27日 御嶽山(標高3,067m)噴火、50人以上が死亡

10月 個人積算線量計(D-シャトル)貸出開始  
1日 ・町内44か所の防犯カメラ運用開始一部地域で上水道が再開  
・川内村の避難解除指示解除準備区域を解除  
2日 ふるさと生産組合により、5月に植えられた稲の収穫作業が、町内下郡山原下地区の水田で行われた  
14日 県教委、来春の県立高募集定員発表。富岡高などサテライト校5校は募集停止に  
22日 福島第一原発1号機原子炉建屋カバー解体作業開始  
24日 富岡高校女子サッカー部が、東北代表として、全日本高等学校女子サッカー選手権大会出場決定  
27日  
28日 いわき市泉に高齢者支援活動拠点「サポートセンターいずみ」開所

11月 1日 県営として初の復興公営住宅が郡山市日和田町に完成  
5日 戦没者の冥福と永遠の平和を祈る「平成26年度富岡町戦没者追悼式」がいわき市のせきのホール鹿島で、震災後初めて執り行われた  
7日 県営として初となる、復興住宅の鍵引き渡し式が郡山市で行われた  
8日 富岡町消防団が、第24回全国消防操法大会小型ポンプ操法の部に出場



双葉警察署からとみおか守り隊に感謝状



ふるさと生産組合が水稻実証栽培を開始

買って出、言うべきは言うしかない冷静な対応に徹してくれる人がいた。辛抱強く耳を傾け、必要な情報を噛み砕いて説明し続けるうちに、次第に町民の信頼が結い直されていく手応えが伝わり始めた。「頼みは役場しかないんだ！」怒号の裏返しの町民の真情も見えてきた。その対応に徹する姿が町職員の姿勢をリードし、あらためて結束を固めていくようだった。

地震、津波、原発事故という前代未聞の複合災害のただ中になげだされ、文字通り途方ない「どうしようもなさ」に翻弄されてきた町民の側も、「どうしてくれるんだ！」の怒りから、ようやく「どうされる(ある)べきか」を訴え始める。それに対する方針や指針が示され、反応も返って来る。町はその声と施策内容とを量り合わせ、あるべき意見や要望をとりまとめ、提案を繰り返し、具体的な施策内容を引き出した。その内実が整うほどに、避難町民にも次第に選択肢として受け止められ、「どうするか」という自分の問題として考えを進め、模索の耐えきれなさから脱し、一步、また一步と、抜け出し、とりわけ農業者・事業者らを先駆けに、復帰再建のため行動を具体化していく姿が見え始める。町民、役場職員双方に、こうした認識が浸透し、復興計画(第二次)策定に活かされていくことになる。

避難で後に残した富岡の町、家、田畑、農場、また店や仕事など、2011年3月11日まで自らのものとしてしていた分野の営みへの思いは、消防団や医療、福祉を中心に、避難直後から思い思いに動き始めた。そ

の場でできること・すべきことを考えた町民が、古里への促しに導かれそれぞれに行動を起こし、呼びかけ合っていた。

そんな思いから再結集していた避難指示解除準備区域の「ふるさと生産組合」が、5月、水稻の実験栽培を開始した。先祖代々の農地を放ったままにはしておけないとの思いに駆られての農業再開だった。

「町を放ったままにはしておけない」という思いからの力を合わせての保全活動は、被災直後から見回りに通い始め消防団有志メンバーによる「とみおか守り隊」に始まっていた。特にこの年2月の常磐自動車道広野一富岡間再開など、周辺の道路事情の改善と共に、不特定多数の町内への出入りも増加、空き巣などの発生がいっそう懸念されていた。“守り隊”の活動に対しては、6月、双葉警察署から感謝状が贈られる。さらに、町内に設置が進められていた44カ所の防犯カメラの運用が8月1日から始まり、24時間監視の体制が強化された。

富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム始動  
民間所有文化財の救出から「ふるさと富岡」の救出へ

「今じゃないとできないんだ！」という職員の訴えから立ち上がった「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム」も、放置され失われてしまうものを守る活動の一つだ。

道路を塞ぎ田畑に散乱していた津波被害の瓦礫が片付き、道路の破断や陥没の補修が進むとともに、現地



富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームによる民間所有文化財救出

に立ち入り、風雨と野生動物の侵入に荒された個人家屋についての処分を検討する町民も増えた。まず2013年3月25日の避難指示区域の再編を期に、そしてこの年、「被害認定基準運用指針」の運用緩和(4月1日)によって、家屋解体が加速することが予想された。そんな中、公的な管理のもとにあった歴史資料・文化財等の救出は国の支援で先行して完了

していたものの、町内旧家や商家に残された建物や書類などはまだ救出されていなかった。このままでは家屋解体と共に廃棄されてしまう……。

「立ち入り出来るようになって真っ先に捨てられるのは汚いもの。その代表格は生活に必要なというわけではない古文書類。民家にあるものはほぼ捨てられてしまう！ それらの中には町民にとってきわめて価値

の高い歴史と文化の資料がある。それらをいま救出して保存しなければ失われてしまう！」

こうした学芸員の危機感からの訴えで、職員有志の活動として立ち上がったのが「歴史・文化等保存プロジェクトチーム」だった。背景には、40年前に作ったきりになっている富岡町史編纂への思いがあった。新しい町史を作らなければならない。そのためには、歴史民俗資料館など公的に保存されたものだけでは足りない。町民によって保有されている歴史資料はもとより、昭和・平成の町の営みを語ってくれる資料が不可欠だ、との思いだ。

情報提供の呼びかけに始まったこの「富岡町歴史・文化等保存プロジェクト」の成果は、混乱の中で置き去りにされ、忘れられようとしていた富岡という町のなりたちと歴史・文化への誇りを救い出し、再発見させ、復興に向けての心の柱を建てる活動となってゆく。

救出活動は、1995年の「阪神・淡路大震災」の経験を踏まえて、大規



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



猪狩 孝平さん (小浜)  
[平成26年5月号]

### 人の恩を実感した 避難生活

今、「人に助けられる」ことのありがたさを感じる日々を送っています。生まれてからこれといった不自由を味わうことなく育ってきた私にとって、東日本大震災、特に津波被災と原発事故による避難は、それまで当たり前と思っていたことが、どれだけありがたいことだったかを実感する大きな転機となりました。

発災当日、私は地元に戻り、高校時代の同級生とともに浪江町内にいました。大地震が発生し、急いで富岡を目指しましたが、道路の損壊と渋滞でなかなかたどり着けませんでした。道中、大津波の被害をラジオ等で知り、海岸近くにある自宅と家族の安否が気になって仕方がありませんでした。どうか無事でいてほしいと祈り続けま

したが、残念なことに自宅は津波で被災。町内の避難所などで家族を探しましたが、祖父は今も行方が分かりません。

避難後、就職内定先とは別の町にある会社で1年ほどお世話になり、内定先での勤務を経て、その後、除染や建設関連作業に携わる会社を設立しました。当初、周囲からは反対を含め厳しい言葉をいただきましたが、未曾有の事態の中だからこそ、復興の一助になるようなチャレンジをしてみたいという決意で行動しました。会社とはいえ事務所を構える余裕はなく、現在の借上げ住宅を事務所として利用するなど組織として不十分な状態ですが、今後も頑張って社業にあたり、ついてきてくれる従業員の福利厚生の実現を図っていきたいと思います。

私は仕事の傍ら、小浜風童太鼓に参加しています。太鼓は津波で流されてしまいましたが、助成制度を利用して再び揃えることができました。また、観陽亭さんに練習場所を提供していただいたり、いわき市の太鼓愛好団体からご協力をいただくなど、多くの皆さんの助けにより平成23年冬から活動を再開しました。これからも故郷復興への願いを仕事や太鼓演奏に込め、進んでいきたいと思っています。

富岡町  
復興・再生のあゆみ

2014(平成26)年度

- 12月 富岡町健康手帳配布開始
  - 2日 福島第一原発4号機の使用済み核燃料取り出し完了
  - 11日 町内の津波流出がれき撤去開始
  - 22日 富岡町役場いわき支所が移転。富岡町社会福祉協議会いわき事業所、いわき平交流サロンと共に施設を集約
  - 23日 政府が、避難区域連携による2020年を復興の目標とする考えを示す。JV(汚染工事共同企業体)が町内パトロール隊を結成
  - 28日 政府が、南相馬市の特定避難推奨地点142地点を解除
- 1月 町内の帰還困難区域(桜並木)で本格除染を実施
  - 3日 富岡高校女子サッカー部が、4年ぶり5回目となる第23回全国高等学校女子サッカー選手権大会に出場



7日 JR富岡駅構内の解体工事を開始(2月中旬終了)



- 11日 富岡町成人式を挙行
- 18日 町内の津波被害住民に対する防災集団移転促進事業説明会を実施(2月まで20回)
- 20日 県外被害者の支援拠点事務所をさいたま市浦和区に開設



- 27日 いわき市小名浜下神白団地の、富岡町民対象復興公営住宅2棟が完成

2月 5日 富岡町農業復興組合が発足

3月 1日 常磐自動車道 常磐富岡IC一浪江IC間が開通し、埼玉県から宮城県までの全線300.4kmが繋がる

- 11日 東日本大震災富岡町慰霊祭を開催
- 19日 富岡町内に仮設焼却施設が完成 4月下旬から本格稼働
- 26日 いわき市常磐に復興公営住宅が完成



震災遺産保存活動(富岡町災害対策本部)



歴史資料の救出活動

模災害時の救出・保存活動を目的に2010年10月に発足、震災後すぐに県北地区での活動を始めていた「ふくしま歴史資料保存ネットワーク」の全面的な協力を得て、2014年7月から開始された。救出の対象となったのは古文書等に限らず、会合の資料や商売で使う帳簿、メモ、写真、手紙など、住民の生活と時代の様子を伝えてくれるあらゆるもの、それによって、住民がいなくなってしまった地域の歴史と古里の記憶をつなぎ止めると思われるすべて…。

「国の支援で県が主導した富岡、大熊、双葉の三町の博物館資料の救出が2013年度でほぼ終わって、あとは各市町村の自主性でということになりました。それなら独自にやろうと手を挙げ、PTを作って動き始めたのが富岡町でした。私たちが震災直後から始めていた、個人の資料の調査・レスキュー・記録といった活動のベースがあったこと、富岡町の意識の高い協力体制ができたこと、そしてもう一つ、当時文部科学省が行っていた大学COC事業(「地(知)の拠点整備事業」)に福島大学の被災地支援事業が採用されて、研究資金の支援が受けられたこと、これらの条件が噛み合っただけでスタートを切ることができました」と、ふくしま歴史資料保存ネットワークの代表をつとめる阿部浩一教授はふり返る。

ともすればハード優先となり見棄てられがちな文化財が、早いうちから救出される運びとなったことは、未曾有の大災害によって大きな痛手を負った住民の心の復興にとって大きな意義を持つことになる。長期にわたる避難によって進んでしまったさまざまな分断。その富岡の内なる

絆の復興のためには、富岡の昔の街並みやそこで行われていた祭りなども含めて心の支えとなる情報を提供していくことが必要で、そのためにも町の歴史・文化の復興が不可欠になる。その核心となる地域の資料を失ってはならない…。

この活動を通じて、富岡が双葉地方の要であったこと、そこに至る地勢的なポテンシャルが明らかになるとともに、富岡町民としてのアイデンティティーの再発見へと発展していった。

2011年3月11日の大震災の経験を証言してくれる震災資料の収集・保管も、この作業に並行して進められる。

### 県外避難者支援拠点事務所を、さいたま市浦和区に開設

#### ——被災者支援が本格化

全国の47都道府県での避難生活を強いられている町民のため、町は国や関係大臣に対してその実情に応じた支援の要望を行い続けた。応急仮設住宅住み替えの柔軟化、高速道路無料措置延長や損害賠償請求権の時効延長などが実現していた。「先が見えない」生活を続ける町民の状況を少しでも切り開き、先への道筋を示すため、必要な施策づくりに取り組む中から、当面する問題の解消を国に投げかけ、さらに要望を重ねた。

町民の2015年1月時点での避難先は、いわき市に約6000人、郡山市約3000人、ほか合わせて約1万1000人が県内。県外は、東京都に約700人、茨城・埼玉両県に各約600人、ほか

全都道府県各地に約4300人、国外にも10人以上、という状況だった。その避難生活を支えることはもちろんだが、その先の生活再建を図ること、町政の第一の課題は常にここにあった。県内の避難先に開いた交流サロンは、ともすれば孤立感に襲われる町民の大きな拠り所となって喜ばれた。そして、こんな場所や機会は県外の避難者こそ必要だった。

2015年1月20日、町は「県外避難者支援拠点事務所」をさいたま市浦和区に開所する。近隣に避難している町民などに声をかけ富岡町復興支援員として4人のスタッフを募り、埼玉県労働者福祉協議会に委託する形で同協議会を本部として、活動をスタート。避難者宅の戸別訪問をはじめ、交流イベントの開催、町行事

への参加を促す「町民ふるさとバス」運行等、長引く避難で孤立感を募らせていた町民に歓迎された。

「県外避難者の皆様が生活再建を進められるような支援を提供したい」との町の意向を受けて、「富岡町のため力になれるのなら」と避難町民2名が加わった現地スタッフらは、全国各地にいる避難者を訪ね、聞き取り調査を行った。この事業のスタートは浪江町よりも少し遅れていたこともあってか、訪ねていくと「遅い」と言われたり、「よく来てくれた」と労われたり……。ともあれ「まず、上がってお茶でも飲んでいがっせ」というやり取りとなり、町の思い出話となり、なかなか尽きないことが少なくなかった。ずっと待たれ

ていたことだったのだ、とスタッフらともども避難生活の思いを噛みしめ合った。時にはかつてやっていた店の客など旧知とのめぐり合いもあって、当時を懐かしみ合った。初めから知り合いとわかっている時には「元気だったかい?」「どうしている?」と、近況を交わし合った。

こうした訪問は3人が1組となって活動した。車で出かけて行った訪問先が駐車できないところだった場合、2人が話している間1人が車で待機できるようにするためだ。朝出かけて夜に帰ってくるというような遠方も多かった。聞き取った内容は、とりまとめて町に報告、生活支援のために生かされた。一度訪ねた先から、「寂しいから来てくれよ」「相談事があるから来てくれないか」

## 富岡町の 皆さんと 共に

MESSAGE



渡部 太一さん

経済産業省貿易経済協力局  
貿易管理部 係長

2012年7月から2014年7月の2年間、経産省派遣職員として富岡町役場に勤務。帰任後も町関係者との交流や町訪問など、富岡町への思いを寄せ続けている。秋田県湯沢市出身。

原発事故への対応がまだまだ手探りだった中、富岡町役場に派遣され、信じがたい現地の被災状況を目の当たりにし、町と同じ目線で復興に向き合うと決意したときのことがありありと思い起こされます。そして、住民対応に全力で取り組む一方で、国への要望や調整に苦勞されていた町の現状を知り、「町と省庁とのパイプ役」に自分の役割を見だし、町の実状を国に届け続けました。この時の経験は私の役人人生の中で最も困難なものであるとともに、最も確かな成果を実感できるものとなりました。やがて、役場職員や町民の方々と共に「桜祭り」など様々な行事を手掛け、皆さんが再会を喜ぶ姿を見るほどに、気持ちが富岡町に入り、ついには町職員への転職を真剣に悩んだこともありました。

富岡町は今、ようやく本格的な復興への歩みを踏み出したところですね。

私がいたころの富岡町の当面の目標は「避難指示解除」でした。町民の皆さんが安心して町に戻って住むことができる現実的な避難指示解除を目指して、山積する課題に真摯に取り組みました。

今でこそ、常磐線の運転再開やさくらモールのオープンなどにより、着実な復興を実感することができますが、当時はこのように復興が目に見える形となって現れる段階ではありませんでした。

思い返してみると、町職員の方々も、町民の方々も、復興の先行きが不透明で、大きな不安を抱えていたはず。町の復興につ

いて前向きな発言をすることにためらいを感じることもあったかもしれません。だからこそ敢えて私は、「絶対に復興させましょう!」と言い続けていました。そうすることで少しでも皆さんの不安を払拭することができればと思っていました。でも実は、そんな私が一番不安で、復興に取り組む信念を自分自身に言い聞かせていたのだと思います。

それが今、こうやって町内の復興が目に見えるものとなってきていること——どんなに難しく大変だと思われることでも、信じて頑張れば必ず何かしらの成果となる。生まれ変わった富岡町の姿こそがそれを証明していると思います。

うまく言葉にすることができないのですが、当時の「本当に復興を実現できるか…」という苦悩は、今は「頑張ってたよかった!」と語れることになりました。これはやはり、復興に向けて富岡町の皆さんをはじめ、いろいろな人たちが携わって、諦めずに推し進めてきた結果にほかならないと思います。だからなおも言わせてください。

「道のりは険しいですが、復興を信じ、未来を諦めないで、これからも頑張りましょう。私は富岡町が大好きです。」



といった電話があって、支援員どうしやり繰りし合って再訪することもあった。

そしてお茶会や食事会、サロンなど、スタッフの活動は避難者がある全国各地で実施された。屋形船を借り切ったイベントなども実施され、大いに喜ばれた。

## 「富岡町災害復興計画(第二次)」検討委員会スタート

動き始めた町民の思いとともに、復興への見通しをつける筋道が整い始めた。その筋道を見極めるべく、本格的復興への施策づくりも動き出す。まずは全体の羅針盤となる「富岡町災害復興計画(第二次)」づくりとともに、平成26年度の春が動き始めた。

委員の公募、選出を経て、8月9日・10日の2日間、郡山の富岡町役場桑野分室(旧福島地方方法務局郡山支局)で、富岡町災害復興計画(第二次)検討委員会の第1回会議が開かれた。公募で選ばれた町民30人、若手を中心とした役場職員から26人、計56人の検討委員が一堂に会した。

第1回のこの日は8班に分かれてワークショップ形式で、「避難者として抱える悩み、問題は何か」をテーマに意見を交わし合った。討論では、解決が必要な課題を出し合い、重要度を点数によって測っていった。すでに長期を経てそれぞれに思いを固めていたこともあって、70以上のテーマの中から、委員らの思いは第一に「ふるさと富岡との心のつながりの維持」に集中。ここから「帰還する」「帰還しない」「長期的に待避し将来的に帰還する(第3の選択肢)」など、避難を強いられた町民がどのような選択をしても町と、地域と、そして町民どうしが、つながりを保っていける仕組みづくりが必要——との計画づくりの方向性を共有しあった。

検討委員会はこのあと3月まで8回、うち第1回から5回までは2日



平成27年3月1日、常磐自動車道全線開通

がかりで、情報発信部会、生活支援部会、心のつながり部会、産業再生・創出部会の4部会に分かれて行われた。延べ約100時間に及んだこの検討委員会では若いメンバーがリーダーシップを発揮するなど、計画だけにとどまらずその先のまちづくりを実際に担う町内のマンパワーの豊かさを感じさせ、復興への助走となる、充実した作業となった。

11月からは、検討委員会からの提案をもとに計画としてまとめていく政策化会議(策定会議)も並行して開催され、翌年3月、計画素案が町民に提案されることとなる。

## 国道6号 富岡—双葉間の交通規制解除 全面通行が可能に

国道6号大熊町・双葉町区域が9月15日、車両に限って全面通行ができるようになった(二輪車通行等は禁止)。この浜通りの交通生命線の復活は、本格的復興の取り組みへの人の流れを呼び戻す大きな契機となった。直後の彼岸には、久しぶりの墓参りの賑わいも…。だがやじ馬的な被災地巡りの車も増え、地域の守りは一段と引き締められた。

年が明けて3月1日には常磐自動車道も全線開通となる。

こうした中、10月1日、先行して復旧工事が進められていた上下水道

が上郡山・下郡山・赤木などの地域で再開されるなど、帰還に向けての復旧復興が目に見えるものとなり始めた。

また、JR富岡駅の解体が始まり(2015年1月7日)、再開通に向けての駅舎整備、バスの運行など町内での暮らしの足となる交通インフラの復旧復興も動き始める。

併せて県内の被災町民支援も本格化していく。特に最も多くの町民が避難しているいわき市では、富岡町支所(いわき合同庁舎内)に駐車場がないなど不便を余儀なくしていたが、12月22日、平北白土に支所を移転。これに合わせて、富岡町生活復興支援センターいわき平交流サロン、富岡町社会福祉協議会いわき事業所の施設も集約し、十分な駐車スペースを確保した上で多目的集会施設を新設した。これにより行政区や自治会等の会合や町のイベントなどが開催しやすくなり、町民同士の集まりも活発化していった。また富岡町民向けの県営復興住宅「下神白団地」の2棟が完成(1月27日)、入居者は生活再建の展望を新たにする。続いていわき市常磐の復興公営住宅「湯長屋団地」も完成(3月26日)するなど、避難生活5年目を目前にしてようやく、落ち着ける生活環境を手にし始める。

# 試験栽培、実証栽培、そして農業再生へ —— 農業者の再結集と挑戦



## 「ふるさと生産組合」からの取り組み

ふるさと生産組合（渡邊康男組合長）は、町内下郡山・毛萱地区の農家が2008（平成20）年に発足させた。農業の担い手の高齢化など時の課題を見据え、農作業の請負など、協働による新しい営農に向けての取り組みに着手していた。しかし、原発事故はその見通しを一変させる。土地を追われた2011（平成23）年は何もできなかった。

避難で散り散りとなった組合員は、農繁期の春夏を無為に過ごし、採り入れの秋、言いようのない寂しさに襲われた。一緒になる機会を見つけては「何かできないか」と話し合った。とにかく先祖から受け継いだ農地を取り戻し、守る。その思い一途、じっとしてはられない。駆り立てられるように動き始めた。

問題は放射能汚染と津波による塩害。とりわけ放射能汚染が深刻だった。当分は人の口に入るものは作れないが、2012年、国の補助を使ったバイオ燃料作物（デントコーンや菜種など）の試験作付けからと、早々に事業を再開する。避難先から富岡まで、近い方で1時間弱、遠ければ2時間以上かけて通い、農業の再生に挑んだ。津波が運んだ瓦礫を拾い、放射性物質吸着除去のゼオライトを撒き…。1年ぶりの農作業、心地よい血がからだを巡り始めるようだった。

翌2013（平成25）年からは、水稻の試験栽培も始めた。

また2014年1月には、バイオ作物から精製したエタノールを1割入れたスクーターを走らせ、耕耘機を唸らせた。この年の正月には、組合員らで、いわき平の仮設住宅の避難所などで餅つき大会を実施、試験栽培で収穫し安全を確認した餅米を使い、避難住民にお正月気分をふるまった。



餅つき大会

2013年からの試験栽培により、水稻の本格作付けへの見通しが開けた。それを踏まえ、2014（平成26）年からは「実証栽培」の段階に進んだ。以後2017（平成29）年まで4年間、年々作付面積を増やしながら実証栽培を実施。安全性が十分に実証されたとして2018（平成30）年からは「通常栽培」（この呼び方には安全を十分に実証したとの組合員の自負が込められている）に移行している。

収穫された米は、実証栽培初年度分から出荷している。品種はコシヒカリ、天のつづ、こがねもち（もち米）の3品種。当初2年はコシヒカリが主だったが、その後天のつづが主体となってゆく。こがねもちはイベント用（餅つき大会等）だ。

2015（平成27）年、県の事業として米以外の作物としては初めてジャガイモを作付けした。全量廃棄が前提だったが、検査の結果は何ら問題なかった。あまりに良い出来

だったこともあり、希望者は各々持ち帰り、食べた。

2016（平成28）年には、キャベツ、ブロッコリー、ほうれん草、小松菜、カブなどの野菜を、組合員みんなで作付けした。県による試験栽培の一環で、問題なしの結果を得たが、悔しくも全て廃棄された。

## 「風評」とのたたかい

ふるさと生産組合による作付けで収穫した農産物は、収量、品質、等級、全量全袋検査など、福島県が独自に行っている厳しい検査のもとにあった。それでまったく問題がないという結果であっても、市場では簡単には受け入れられない。価格も「風評」ならぬ実害だった。市場の状況は徐々に回復しているというものの、業務用米ととして買い叩かれる現実がある。

しかし組合員らはあまりそのことを考えず（とらわれず）、安心・安全なものを作り発信することに徹しよう、と話し合った。

放射能汚染は環境災害であり、大地は海洋に劣らず、ある意味ではそれ以上に決定的なダメージを受けた。その影響による「風評」はどれほど、科学を動員しても払拭はできず、真正面から証明と公開をかさね、時間をかけてゆくしかない。安全PRさえ逆効果になりかねないのが原発事故が招いた不信であり、心の汚染なのだ。県による全袋検査は、その認識のもとにあるものといえるだろうし、県内の営農者、とりわけ相双の人々はそのことを深く噛みしめながら農業再生の営みを問い続けている。

そうした活動の大きな支えとなっているのが、内外からのさまざまな援助・支援だ。ふるさと生産組合では、そうした中から特に早稲田大学の学生など若い力を積極的に受け入れ、出向いても行くなどして交流を深めた。若い人たちにこそ人に知ってもらいたい、そして広めてもらいたいとの思いからだったが、組合員らが特に期待したのは彼らが提供してくれる奇抜なアイデアだった。理工学部の学生でも農業に興味を持つ学生がいて、いろいろ話してくれる。それが大きな刺激となって、やる気を高めてくれるように感じるのだ。150人分ものレポートを受け取ったと



実証栽培の田植え（2014年5月14日）

きには、書かれていた質問全てに返事を書き、「また機会があったら呼んで下さい！」と添えた。

「ふるさと生産組合」が先駆けとなった富岡町の農業復興への取り組みにより、除染した農地をそれ以上荒廃させないこと、営農再開のための環境を整え、町内農業者の帰還につなげていくことなど、農地保全が町内に広がってゆくこととなる。町内の農地は約1100ヘクタール。地区により汚染状況などが異なるため一律には行かないが、農地の耕起や除草など、営農再開のために必要となったこうした営みは先祖の開拓時代を思い起こさせた。それを思うと、不思議と力が湧いてくるようだった。

## 「農業アクションプラン——富岡町農業復興実施計画」策定

2017年2月27日、「農業アクションプラン——富岡町農業復興実施計画」が策定された。その構成は、放射能汚染によってもたらされた複合災害の困難と、“ふるさと富岡”の支えであった大地自然への被害の深刻さがにじみ出るものとなり、他のアクションプランとは趣が異なっていた。

内容は、農業を営んでいた町民それぞれの思いを軸にした4部構成で、具体的な取り組みを示しながら、レベルの異なる懸念や意思に応えるかたちとなった。

1. 農業をはじめるか判断するための情報を得たい！  
(放射性物質測定体制構築ほか情報提供)
2. 農業を再開したい！  
(新たなチャレンジ環境の整備・支援)
3. 農業をやってみたい！  
(「いきがい農業」や新たな農業者支援)
4. 農業復興における支援を確認したい！  
(交付金や支援事業)

また営農再開に向けては、「営農再開環境整備期」と「営農再開期」との2つのサイクルを通じて、農地の地力回復の上に新しい農業とその担い手の確保などに取り組んでいく構えを示した。



今ここまでの歴史と  
くらしの成り立ちを学び  
誇りある未来を 守る  
“ふるさと富岡”の



2

## 富岡町災害復興計画(第二次)策定 見えてきた帰還への道筋

平成27年度 2015.4.1-2016.3.31

### 切実斬新 — 未来に問う協働の知

被災、全町避難、5年目。福島県で合計12万人が依然として避難生活を強いられている中、富岡町内での津波流出がれきの撤去の進捗、JR富岡駅の解体など、長らく震災の傷跡がそのままだった町の景色もようやく変わり始めた。農地除染や帰還困難区域内にある桜並木の先行的な除染が進むとともに、復旧から帰還・復興への環境づくり、種まきへと、「目に見える復興」を合言葉に町職員らの動きも活気づいていく。

その活気は、どこよりも「富岡町災害復興計画(第二次)」の策定検討会議から吹き出すようだった。これほど多くの町民が町職員と一緒に、これほど多くの時間をかけて、意見を交わし議論を重ねている。その手応えから互いに活気づき、町民の「生活再建=心の復興」と町の「ふるさと復興」を両輪とするバランスを重視する富岡町の再生・復興のかたちが浮かび上がり、多彩な行動力に満ちた委員らの協働を实らせていった。

思い浮かべる富岡の景色が色づき始めた。失われていた春を一気に取り戻そうとするかのように――。

「富岡町災害復興計画(第二次)」は、検討委員会4部会(情報発信部会/生活支援部会/心のつながり部会/産業再生・創出部会)で討議された「富岡町の復興を進める56の提案」と、それを實現するための約300に及ぶ事業アイデアをもとに、有識者・復興庁・福島県各2名と町職員・事務局32名、全38名の委員で構成された政策化会議の中で計画立案された。この過程を通して、町民委員も役場職員も、互いに抱えていた思いをすべて出し合い、その思いや動きを伝え切れていないでいた事実を直視し合いながら、必要な取り組みを丹念に書き出し確認していった。

委員らの志気は高く、とりわけ町民委員らは熱かった。なすすべなく

長期化を強いられ必死の避難生活を続けながら、自分の声が届かないところで決められ、進んでいく「復興」に対する無力感・疎外感とあいまって、行政との越えられない溝を痛感していた。後にした古里への思いを馳せつつ、それぞれの立場で直面し抱き続け戦い続けていたその生活再建の苦悩の現実とふるさと存亡の危機感を共有していた。そして「国を動かすためには町と一緒に行動しなければだめだ」との思いに行きつき、委員に応募してきたからだ。

役場職員らもまた、同じ危機感を抱く若手を中心の顔ぶれだった。その思いの丈を注ぎ続けた双方の志気の高さが、会をかさねるほどに深まっていた両者の溝を埋め、やがて



行政、町民、有識者の垣根を越えて活発な意見を出し合った災害復興計画(第二次)検討委員会

### 富岡町 復興・再生のあゆみ

#### 2015(平成27)年度

- 4月 8日 県立中高一貫校「ふたば未来学園高校」が広野町に開校、152人入学
- 10日 有害狩猟鳥獣捕獲隊員 委託状交付式
- 11日 富岡町復興への集い2015



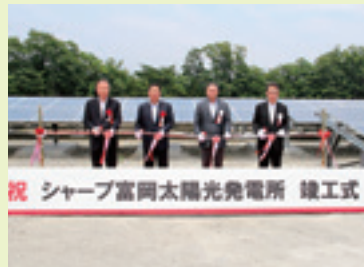
- 19日 富岡町消防団の春季検閲
- 20日 「富岡町災害復興計画(第二次)」を町長に提出
- 下旬 仮設焼却施設稼働



- 5月 15日 ふるさと生産組合が下郡山原下地区の水田で田植えを実施

- 6月 1日 町立幼・小・中三春校に仮設体育館が完成
- 15日 福島県、自主避難者への住宅無償支援を2017年3月末で打ち切りへ
- 17日 選挙権18歳以上 参議院で可決  
富岡町災害復興計画(第二次)を策定
- 19日 富岡漁港災害復旧工事安全祈願祭
- 30日 富岡町出身の方を講師として招き、今まで知らなかった富岡について学ぶ「ふるさと創造学」が三春校で開催

- 7月 5日 第2回「出会いのお茶会」開催
- 13日 シャープ富岡太陽光発電所竣工式



- 25日 富岡町合併60周年記念式典
- 8月 3日 ・いわき支所での戸籍届受付開始  
・富岡工業団地に新企業(株式会社万象ホールディングス) 基本協定書調印

共有する一つの地平の上に作り上げられるべき「新しい富岡」の姿と、そこに至る道筋とを描き出していった。その熱気はそのまま富岡町災害復興計画(第二次)に脈打っているが、とりわけ「資料編」に収められた「各部会での事業アイデア」に熱い。

役場職員は、この第二次計画検討策定のための調査も兼ねて行った仮設住宅を訪ねての聞き取りや、全国各地で開いた町政懇談会を通して得たさまざまな切実な町民の声を集めていた。そこから町民の行きつく先は「役場だけが頼りなんだ」という行き場のなさ、深刻さが滲み出ていた。この「役場への期待」に応えるために必要な施策とは——避難生活の現場から検討会議への助走となった。

こうしたやり取りの中から、避難町民のそれぞれの現実に即した意向を尊重しながら、「帰還する」「帰還しない」「今は判断できない・判断しない」という3つの道を町民に開きつつ、「町民一人ひとりの“心”の復興」と「町民の心をつなぐ“ふるさと富岡”の復興」を両輪(基本理念)とす

る「富岡町災害復興計画(第二次)」が作られ、6月17日、策定された。ハード重視型の計画からソフトもそれ以上に重視する「町民の郷土愛とアイデンティティーが凝縮された」力作だった。おのずと、さまざまな苦悶に耐えている町民一人ひとりをゆるがせにしないこまやかな支援の体系化となっていた。

町民委員の一人として検討委員会の会長を務めた渡辺和則さんは、その計画書中のあいさつに「町民と行政が一体となって新しい富岡町を創造していく羅針盤になるものと確信しています。そして抱えてきた町民と行政の溝を埋める最後のチャンスになるとも感じています」としたため、「将来帰還を望み長期待避している町民、やむを得ず移住を決断した町民、不安を抱えながら帰還する町民、その全てが自信と誇りを持って次世代に継承できる富岡町を作り上げなければなりません」と念を押した。そして「そのためには、富岡町民自らが作り上げたこの第二次復興計画という名の町民の意思が、首長及び行政並びに議会に信託され、

一つひとつ一歩ずつ実現されていかなければなりません。そしてこの復興計画実現のために、町民一人一人には自ら行動し、見守り、それを見届ける使命と責任があるのだと思っています」と自らの決意を語り、「共に新しい未来の富岡町を見に行こうではありませんか」と呼びかけた。

また、政策化会議の会長を務めた土方吉雄委員(日本大学工学部准教授)は「見通しの立っていない課題が多く、検討・判断が難しかったわけですが、町民と行政の協働によってまとまった本計画は、復興まちづくりの羅針盤であるとともに、協働のまちづくりの契機ともなり、復興に向けた大きな希望の光をみる思いです」と、計画実現への期待とともに策定に関わった委員・職員らが費やした時間的・精神的労苦をねぎらった。

ともに、新しいまちづくりによる復興への羅針盤とするにふさわしい、町民の実態に寄り添った計画をまとめあげることができたとの思いを踏まえての、全町民への力強いエールでもあった。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



鈴木 博英さん (本町)  
[平成26年8月号]

### 暖簾を失うことの重み

理容店の4代目として、先代から受け継いできたものを置いたまま富岡を離れなければならないことは、非常に心苦しいことでした。私有家業を継いでから積み重ねてきたことは、私自身が再起すれば済むことでしょうか、先代が築いてきたものはそうもいきません。町を離れたことで、暖簾の重みのようなものを改めて感じました。

被災後、私たち一家は親類宅等を経て、しばらく三春町内の借上げ住宅で生活していました。震災発生当日に中学校の卒業式を迎えた長男は、双葉高校に入学することになっていました。長男は双葉高校で野球をやるといふ夢を持っていましたが、避難により田村高校を編入学先としました。その後、いわき市内でサテライト開校し

た双葉高校に寮ができ、野球部の活動も再開されたことから2年生進級時に同校へ編入し、単身いわきに移り通学を始めました。

私は、富岡町の臨時職員として三春町、郡山市、大玉村の避難所6か所を訪問しながら、避難町民のサポート業務として3か月間、散髪の仕事などをしていました。臨時職員の雇用期間終了後はしばらく仕事から離れましたが、長女の高校進学に合わせていわき市内に生活拠点を移しました。

そんな時、長女が理容の仕事に興味があり、高校卒業後の進路として理美容専門学校に進みたいとの相談を受け、「後継ぎができた」と何か安心したような気持ちになりました。そうしたことも後押しになり、いわき市内で本格的に店舗探しを始めました。当初はテナントでも思いましたが、良い物件に巡り合い、改築を経てこの5月1日から、再び「第一理容所」として営業を開始しました。

いわき市は同業者の数が多いため、競争も激しいのですが、私たちと同じように避難している皆さんが気軽に訪れ、施術後にはお茶を飲みながらリラックスして故郷の話でもできるような空間を提供できればと思っています。

富岡町  
復興・再生のあゆみ



## 富岡町災害復興計画(第二次)の概要

どの道を選んでも ふるさとに誇りを感じ 富岡のつながりを保ち続けられる町  
これから加わる仲間も居心地よく親しめる地域をめざして

### 計画の対象

- ・町民と将来も含めて富岡町にかかわる全ての人
- ・富岡町全域及び避難先地域

### 計画期間 2015年～2024年(10年間)

- ・短期復興期：
  - 復旧期 2015年～2016年
  - 復興期 2017年～2020年
- ・中・長期復興期：
  - 発展期 2021年～2024年…

### 帰還の時期の考え方と考慮すべき要件

- ・早ければ2017(平成29)年4月の帰還開始をめざす
- ・町は帰還に向けた環境整備を進め、町民の意見を踏まえ避難指示解除に関する判断を行う

### 基本理念

1. 町民一人ひとりの“心”の復興
2. 町民の心をつなぐ“ふるさと富岡”の復興

### 基本方針

1. 生活の再建
  - 個々によりそう暮らしの支援
  - 『町民一人ひとりを支える心身両面のサポート』

2. 町内の復旧・復興
  - 段階的かつ着実に進める
  - 『暮らし・仕事・地域の復興』
3. 絆づくり
  - 町や町民とのつながりを守り、育む
  - 『将来にわたる町・町民との関係づくり』
4. 情報発信
  - 町民それぞれの立場に対処する
  - 『正しく分かりやすい情報の発信』
5. 実行体制づくり
  - 復興に向けた『みんなの支えあいと役割分担』

### 基本方針を実現するための重点プロジェクト(12プロジェクト)

1. 生活再建支援プロジェクト
  - ① ふるさと富岡の心のつながりづくり
  - ② 町民ニーズの把握と自立を目指した個別支援の強化・見える化
  - ③ 公営住宅の整備と町内の土地建物管理の支援
2. インフラ復旧・拠点整備プロジェクト
  - ① 住民のための復興拠点の整備
  - ② 町と町民がともに考えた復興祈念公園
  - ③ 広域的な道路・交通基盤の整備
3. 産業再生・創出プロジェクト
  - ① 農業・農地再生に向けた取り組み
  - ② エネルギーを中核とした産業によるまちづくり
  - ③ 「イノベーション・コースト構想」拠点施設などの誘致・具現化
4. 福祉・教育プロジェクト

## 2015(平成27)年度

- 8月**
- 25日 政府、子ども・被災者支援法の基本方針改定(支援縮小)を閣議決定
  - 27日 富岡町と福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定書締結式
  - 28日 廃炉国際共同研究センター「国際共同研究棟」町内設置決定
- 9月**
- 1日 富岡町再生・発展の先駆けアクションプラン(復興拠点整備計画)策定
  - 富岡町除染検証委員会設置
  - 3日 平成27年度富岡町敬老会(郡山市会場)
  - 9日～11日 会津地方を中心に50年一度の大雨(関東・東北豪雨)
  - 10日 平成27年度富岡町敬老会(いわき市会場)



- 14日 阿蘇山中岳噴火
- 29日 ふるさと生産組合による稲刈り

- 10月**
- 1日 役場機能(復旧課・復興推進課)町内で一部再開



- ・双葉警察署一部再開
- 5日 富岡町交流サロン開所



- ノーベル生理学・医学賞に大村智氏(5日)、同物理学賞に梶田隆章氏(6日)

- 6日 復興公営住宅(大玉村宮横堀平団地)1街区鍵引渡し式
- 13日 町内の放射線量の情報を収集・精査し、除染による効果の分析・検証を行う町除染検証委員会が行われた
- 15日 平成27年度富岡町町政懇談会
- 18日 第1回富岡町シンボル検討委員会開催

- ① 子どもたちの意向の尊重と子どもの教育環境の整備
- ② 心身ともに健康で安心して生活ができる医療・福祉の充実
- ③ 町民の放射線健康管理の充実

- の生活再建などを支援
  - ・ 帰還に応える町内の復興・復旧
  - ・ 地域産業の再生(はたらく場)
  - ・ 帰還に関する生活支援
  - ・ 健康管理支援

## 見え始めた道筋——加速する本格復興への拠点整備

2015年度の新年度予算は一般会計と特別会計を合わせると約220億円、過去最大の規模となった。災害復興計画(第二次)の策定とともにようやく緒に就いた復興をさらに目に見えるものとするため、インフラ等復旧経費のほかに事業再開支援や生活再建支援などの復興関連予算が計上された結果だった。

災害復興計画(第二次)は、いわば富岡町存続のための計画といえた。すなわち、町民あつての復興。そのために、町民の実態と現実を直視して開いた町民の意向別の「3つの道」の明記を第一の特徴としていた。これは計画の2つの基本理念「町民の“心”の復興」と「町民の心をつなぐ“ふるさと富岡”の復興」を具現するための「意向別の具体的取り組み」のかたちだった。端的には「帰る」「帰らない」「まだ判断できない(しない)」の3つの意向に対応して、町民それぞれのさまざまな事情と思いに寄り添い続けていくことの表明だっ

### 分野別の具体的取り組みの構成

- ◎生活再建支援(66の取り組み)
  - 1. 復旧期における生活再建と雇用の確保 10
  - 2. 住宅再建と生活環境の向上 56
- ◎インフラ復旧・拠点整備(43の取り組み)
  - 3. 除染・廃炉作業の推進 14
  - 4. 町内の都市基盤と拠点の整備 29
- ◎産業再生・創出(24の取り組み)
  - 5. 地域産業の再生・創出 24
- ◎福祉・教育(53の取り組み)
  - 6. 健康福祉の再生・充実 34
  - 7. 教育と学習の再生・充実 19
- ◎情報収集・発信(30の取り組み)
  - 8. 情報の収集・発信 30

### 第2の道 帰還しない

- ◎町民の意向(希望)に応じて支援
  - ・ 町との絆の維持
  - ・ 町内の資産の管理
  - ・ 健康管理支援
  - ・ 情報発信

### 第3の道 今は判断できない・判断しない

- ◎富岡とのつながりを保ちながら生活が続けられるための支援
- ◎将来の帰還や町との関わり(絆)の維持に向けた支援
  - ・ 避難先での生活支援
  - ・ 町との絆の維持
  - ・ 町内の資産の管理
  - ・ 健康管理支援
  - ・ 避難先での医療福祉、教育

### 町民の意向別 具体的取り組み(支援)

- 第1の道 帰還する
  - ◎帰還に向けた環境づくり、帰還後



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



白戸 勝美さん (夜の森駅前北)  
[平成26年11月号]

### 事業再開を断念 いま思うこと

私は青森県津軽地方の出身です。夏はそれなりに暑いところですが、冬は雪に閉ざされます。富岡町は真冬でも雪がほとんど降らず、日差しがあり過ごしやすい場所です。富岡町に移る前、私は東京でビニールなどの合成樹脂加工の仕事に就いていました。そこで大熊町出身の妻と結婚し、昭和52年頃、富岡町に移り住みました。

富岡町では地元の企業に勤務していましたが、東京での仕事でお世話になった方から、富岡でビニール加工の仕事をしなかと話があり、昭和60年に私と従業員数名の体制で会社を興しました。

設立当初は主に手帳などの表紙カバーの加工・製造を行っていました。当時はまだ常磐自動車道が日立北イン

ターチェンジまでしかなく、製品をトラックに積んで自らハンドルを握り、東京方面への納品を行うことも。その後、市場環境の変化により、フレコンバッグの製造に業務内容を転換しました。当初、品質の維持や様々な注文への対応など苦労することも多々ありましたが、徐々に取引先から良い評価を頂けるようになり、お陰様で被災当時は15名の従業員の皆さんに働いてもらえるようになっていました。

東日本大震災では、幸い工場が被災することはありませんでした。地震の揺れが落ち着いた後、自宅の様子を見に行きましたが、家財が散乱していたものの、建物には大きな被害はありませんでした。翌週からは仕事を再開できるかと思っていましたが、避難により仕事は断たれ、従業員も各地にバラバラ、事業の再開は諦めざるを得ませんでした。

現在、私は妻と共に郡山市内で生活していますが、集合住宅での生活には慣れることができません。上の階の生活音、そして同じような迷惑を下の階の方にかけてはいないかと気を遣う日々ですが、福島市内や宮城県内に住む娘一家を時折訪れては、孫の顔を見て少しでも気持ちを支えようとしています。



た。

折しもこの年は昭和30(1955)年に当時の富岡町と双葉町(旧上岡村・現在の双葉町は翌昭和31年に標葉町が改称して誕生)が合併して現在の富岡町となってから60周年の年。7月25日の記念式典(いわき明星大学児玉記念講堂)をはじめとして催された記念イベントを通して「3つの道」が強調され、県外避難の町民にも、さいたま市に置いた支援拠点支援員による戸別訪問や情報発信、交流イベント開催などを通して拡充が図られた。それまで「帰る」「帰らない」の二択の問いや自問にとらわれ、言い知れぬ不当感と不毛感に悩まされ、疲れて口が重くなっていた町民の心もここからほぐれ出したようにも感じられた。これを期に離ればなれになっていた町民も「ふるさと富岡」への思いを新たに、町民としての絆を確認し合い、自らの生活再建・復興への足どりを確かにしていくようだった。

同時に町は、災害復興計画(第二次)の5つの基本方針を実現するため4つの重点プロジェクトに掲げた12のプロジェクトの推進・実現に拍車をかけるアクションプランを次々に発表していくことになる。

まず復興の先駆けとなる「富岡町再生・発展の先駆けアクションプラン～復興拠点整備計画～」を9月に

発表。10月1日には町内の役場本庁舎の一部(役場復旧課・復興推進課)と保健センターが業務を再開、5日には富岡町交流サロンが開所する。

「富岡町再生・発展の先駆けアクションプラン」は、文字通りすべての復興アクションの先駆けに位置づけられたプランで、「「くらし」の再生」「にぎわいづくり」「あらたな交流拠点」などの整備が盛り込まれた。

その主な内容は、

- ・災害公営住宅を整備(先行50戸、曲田地区)
- ・町立診療所を開設(曲田地区)
- ・複合商業施設を再開
- ・交流サロン設置(国道6号沿い)
- ・JR富岡駅前の開発
- ・路線バスの再開
- ・廃炉国際共同研究センター開設による産業集積と交流促進(候補地：王塚地区)
- ・アーカイブ施設の設置(復興拠点内)

などで、かつて「ショッピングプラザ Tom-とむ」があった賑わいの中心地には、公設民営型の複合商業施設を整備する方針が明記された。

震災前には隣接する曲田地区に土地区画整理事業が進められていた。その曲田地区に災害公営住宅を整備することにすれば、一帯を復興再生



「3つの道」が示された合併60周年記念式典

富岡町  
復興・再生のあゆみ

2015(平成27)年度

10月 30日 ・保険・福祉アクションプラン検討委員会設置  
・富岡消防署臨時拠点開所式

11月 3日 友好都市、杉戸町産業祭で富岡復興支援



5日 平成27年度富岡町戦没者追悼式・慰霊祭

11日 富岡町帰町検討委員会設置



13日 バリ同時多発テロ事件

15日 第27回ふくしま駅伝で町の部10位入賞、8区・鈴木雄翔選手は区間賞を受賞

12月 10日 「第3の道」実現アクションプラン策定プロジェクトチーム発足

14日 富岡町マスコットキャラクター及び富岡町キャッチフレーズが発表

22日 町除染検証委員会が中間報告書を提出

24日 富岡町災害公営住宅協定書締結式

1月 10日 平成28年富岡町成人式

15日 軽井沢スキーバス転落事故

22日 ・富岡町公式マスコットキャラクター「とみっぴー」お披露目  
・平成28年富岡町表彰式・賀詞交換会

25日 証明書コンビニ交付がスタート

27日 大玉村営復興公営住宅竣工式

2月 24日 東電、発生当時の事故判定マニュアルを「発見」と発表

3月 8日 富岡町帰町計画を策定

10日 富岡町防災会議を設置

17日~ 特例宿泊開始(全3回)

25日 富岡町保険・福祉アクションプラン策定  
県農業総合センター浜地域農業再生研究センター起工式(南相馬市原町区)

27日 富岡町議会議員一般選挙

拠点としてスピード感を持って「くらし」の再生」と「にぎわい」を見える化(シンボル化)することができる——とかねて下準備を進めてきたのが先駆け地区だった。

いち早く、旧 Tom-とむ 向かいの場所に「富岡町交流サロン」が10月5日にオープンした。年中無休で運営を委託したふたば商工(株)のスタッフ2名が常駐したが、町民からの反響は予想以上だった。次々に訪れる人が増えて、ちりぢりになっていた町民どうしがつながりを確かめ合う場所となった。もとよりこの辺りはかつて富岡町の顔ともいえるべきメインストリート、東の間その思い出話の花が咲くこともしばしばだ。

さらに、水面下で地権者との調整などに奔走していた職員らの先駆け

の上に蒔かれた「町立とみおか診療所」「複合商業施設 さくらモールとみおか」などの種がみるみる芽を出し、開花していく。

### 富岡町除染検証委員会

帰還に向けての第一の条件となるのはまず除染、それにより環境の安全が確立されることだ。国による除染作業が進められるなか、町は富岡町除染検証委員会を9月1日に設立する。実施された除染事業の進捗に応じて町独自に情報を収集精査し、空間線量率の低減効果等について調査し、帰還の安全を検証、ひいては適切な帰還時期の判断に生かすためだ。委員は放射線に関する専門家5人で構成され、福島大学共生システム理工学類の河津賢澄(かわつけん

ちょう)特任教授が委員長に就いた。

放射能汚染に対する県民の不安に関しては、発災直後の対応・応答のまずさから深刻なディスコミュニケーションが起きてしまい、安全・安心への冷静な見極め姿勢が損なわれた経緯がある。いわゆる「安全神話」を背景に放射線に関する意識も人材もないまま放射能汚染災害に直面、手当たり次第につかんだり、一方的に押し付けられたりした「科学的知見」に翻弄され、その混乱のまま不信へと陥ってゆく観を呈したのだった。その経験を踏まえ、検証委員会は現場一つひとつの状況に即して科学的な精査を行うことはもとより、「町民に寄り添った議論」を行っていくことを委員の共通認識とした。「一番の趣旨はどこにあるかとい

## 富岡町の皆さんと共に

MESSAGE



吉岡 崇さん

杉戸町役場  
くらし安全課消防・防災担当  
主事

2013年4月1日から2016年3月31日までの3年間、富岡町友好都市の埼玉県杉戸町からの派遣職員として富岡町役場に勤務。

着任したのは、平成25年3月25日に行われた避難指示区域見直し(帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域の3つに再編)の1週間後でした。長い避難生活に少なからず動きが出て来る時期だったのかなと思います。

私は生活支援課の住宅支援係で、仮設住宅や借上げ住宅の入退きの施設管理を主に担当しました。仮設住宅の入居率は100%に近い状況で、その分住宅問題やトラブルもよくある状況でした。その後、住居が復興公営住宅建設に伴い仮設から常設へシフトチェンジをしていく過程で、町民は自分で住まいを設けていくようになりました。併せて住宅支援係として、仮設住宅や借上げ住宅の町民に対して、どのように今後生活拠点を設けていくのかを考え示さなければいけないという時期でした。

とはいえ、災害救助法という大前提の法律がある中で出来ることや出来ないことなどを踏まえ、時には、町民の要望に「それは出来ない」と言わなければいけないときもありました。しかし、一方的に要望を拒否するのではなく、それぞれの避難してきた事情を考慮して、別の選択肢を示し、自分で判断して納得してもらうようにしないといけない。その説明や町民の要望に応えることが非常に苦労したのかなと思います。

前例のない災害ゆえに、関係法や行政手続・体系など、現実との矛盾も肌で感じていましたので、うまく対応できていたかどうかは未だに考えるときがあります。

他方で、第2次災害復興計画の策定に向けた作業にも参加させていただきました。休日に町民と職員が一緒になって富岡町の将来のために話し合っているときに、物理的

な再建だけではなく、町民の心の復興にどう結びつけていくかということがより大きな問題として議論されていたことが強く印象に残っています。

また、富岡町歴史・文化等保存プロジェクトにメンバーとして、富岡町を「過去(歴史・文化)・現在・未来」と多面的に知る機会がありました。

その経験により、多くの富岡町民の皆さんと接する機会がある中で、避難状況は異なるけれども、富岡町を想う気持ちはみんな同じで、熱い気持ちを持っているということ。思えば、それは富岡町役場にいた3年間を通してずっと感じていたことでもありました。

そして、熱い気持ちを持つ反面、未曾有の大災害で辛い思いをした人は多かったと思います。心の復興のペースは一人ひとり異なっていて、背負うものが重いほど、機が熟すまでに長い年月が必要なのだらうと思いました。

富岡町はいま、帰町して復興のまちづくりに取り組まれているところですが、まだまだ困難なことがたくさんあると思います。帰還したからこそ、町民が本当に戻ってくるかどうかなど、目に見えて分かってしまう状況もあるかと思っています。その中で、状況をマイナスに捉えるのではなく、いかにプラスに取るか、今あるものでどれだけの復興が実現していけるかということに、いま富岡町の皆さんは挑戦されているのだと思います。

友好都市杉戸町の復興支援として派遣された3年間を通して私自身が大きな「成長支援」をいただいたと感じております。その感謝をもって、今後の復興に微力ながら協力させていただき、将来的にもかわりを持ち続けていきたいと願っています。



町内での調査・検証

うと、いわゆる安全性だけの議論ではないわけです。科学的に安全かどうかというのは、いろいろ見解もありますが、ずっと原子力をやっていた人、放射能関係でやっている人なら、当然ながらある程度の知識もあるし、どのぐらいの被ばくをしても大丈夫か、皆持っているわけです。しかし、そういった自分の経験だけで話すと、どうしてもいわゆる科学的な話になってしまう。でも今回の事故は、そんな甘いものではなく、住民の方の見方が厳しくからんでくるわけですね。

よく言われるのは、安全という部分と安心という部分があり、安全の部分はいわゆる科学的な議論だけでいいかもしれないけれども、実際に安心感を住民が持つのは、いわゆる放射線量の相場観だけでなく、単に科学的なものばかりでなく、例えば環境省に対してとか、国に対してとか、県に対してとか、行政に対してという面もあるでしょう。そういう思いも含めて町民に寄り添った形での評価をはじめにしましょう、と。

町民がどのように思うのか、その思いもさまざまにあるのですよね、いろいろな人がいるわけですから。それも聞きながら、そういう思いも含めて検証していきましょう、と」(河津委員長)

この姿勢は、調査検証の結果を町民に説明する際に、その意味するところを丁寧に伝えることへと引き継がれる。

除染検証委員会は設立年度内に5回開催され、12月22日には中間報告を町に提出、この中で4項目の緊急提言を行った。

### 富岡町除染検証委員会緊急提言

- 1) 復興拠点等における除染未実施箇所の除染
- 2) 住宅地等における局所的に線量が高い箇所の再除染
- 3) 居住制限区域と帰還困難区域の境界付近の空間線量率低減(帰還困難区域側の一定区域の除染実施の必要)
- 4) 町民の不安解消施策(検証結果を用いるなどしての丁寧な説明による理解を促進し、不安を解消するため、町内に放射線や除染に関する情報を発信できる組織や施設を整備し、専門知識を持った相談員を配置する必要)

町はこれをもとに、復興拠点の早期除染、再汚染への対応など、帰還を望んでいる町民の安全・安心につながる除染の徹底を強く求める要望書を丸川環境大臣に手渡し申し入れる。

### 「富岡町帰町計画(まち・ひと・しごと創生総合戦略)」と帰町検討委員会

災害復興計画(第二次)によって開かれた帰町への道筋に即して、町民にとって必要となる分野ごとの実施計画(アクションプラン)の策定、その実施に必要な行政等サービス提供体制の構築が矢継ぎ早に進められた。10月には町内保健センターでの役場機能一部再開、年明けには各種証明書のコンビニ交付サービス(双葉郡初)が始まった。また「保健・福祉アクションプラン検討委員会」が10月に、「帰町検討委員会」が11月に設置され、3月の「富岡町帰町計画(まち・ひと・しごと創生総合戦略)」「保健・福祉アクションプラン～健康で安心して暮らせるまちづくりをめざして～」の策定を見ることとなる。

「富岡町帰町計画(まち・ひと・しごと創生総合戦略)」は、災害復興計画(第二次)に「2017年4月」と掲げられた帰町開始時期目標を念頭に、その可否判断の要件となる「安全の確

保(7項目)」と「生活に必要な機能の回復(14項目)」についての評価内容を帰町検討委員会で書き出し、整理した計画案をもとに策定された。いわば帰還開始の判断の前提条件を絞り込んだものとも、国の避難指示解除を受け入れるための前提条件を書き出したものともいえる。

2017年4月という帰町開始時期は、もともとは2012年9月26日に町が出した「今後5年間は帰還は困難かつ不可能」との判断に基づく「帰還できない」宣言とともに見通しをつけていた時期だった。その最大の要件は除染、原子力発電所の安全対策などの「安全の確保」に尽きる。その上で「安全・安心な生活の再生」「定住促進」「文化と絆の再生・継承」など3つの基本目標を掲げ、帰還に関する要件の充足に向けた施策・取り組みも示した。

町はこの帰町計画に基づき、帰町検討委員会・除染検証委員会による客観的な現状評価と町議会・町民の声を聞きながら、総合的に帰還開始時期を検討し、かつ帰町環境の整備を進めていくこととなる。

### 帰還に関する考慮要件(富岡町帰町計画)

#### 【安全の確保】

- ① 除染 ② 放射線量の推移
- ③ 放射性物質に汚染された廃棄物の管理・処分
- ④ 放射線モニタリングの実施
- ⑤ 放射線影響への対応
- ⑥ 原子力発電所の安全対策
- ⑦ 防災及び防犯・防火対策

#### 【生活に必要な機能の回復】

- ① ライフライン ② 道路
- ③ 公共交通 ④ 住宅 ⑤ 商業
- ⑥ 介護・福祉 ⑦ 医療
- ⑧ 金融・郵便 ⑨ 公益サービス
- ⑩ 農業 ⑪ 産業 ⑫ 教育環境
- ⑬ 郷土文化
- ⑭ スポーツ・レクリエーション

「帰町検討委員会は、帰町するというためには、どういうことがなけれ

ばいけないということを町に要望・要請しなければならないか、ということで検討していきました。基本的に最低限こういう環境、こういうことをやらなければならないだろうということです。

でも計画として決めたことでも、町民に押し付けるわけにはいきません。あくまでも情報提供として考えられるべきことですね。町がその環境づくりをして、その進捗を町民に逐一知らせていく。こういう環境になったからといって、さあ帰町だとか、政治的な意味で急ぐ感じも見えたものですから、もうちょっと段階的に、線量の測定ポイントをもう少し細かくやって、見える形になってから判断してもらおう。帰町する方の敷地周辺の線量を細かく測って、こうですよ、と資料を提供して、それでその人が帰ると。そういうところをもう少し細かくやるべきではないかということ、個人的には思っていました。

専門家の委員の方も、やはり住民が帰るためにそのあたりについて理解していただける環境づくりという

か、そういうことをやらないといけないだろうということは言っていました。たとえば線量マップにしても、もう少し分かりやすく、字も大きくし、どこのエリアかはっきり分かるように、町民に見せるべきでは、といったようなことです。

いずれにしても、今の段階では目の前のことを一つひとつ片付けながら、新しいまちをつくっていくことです。そして町民に帰って来てよと言っても、帰れる人と帰れない人がいます。そこはもう個人個人に委ねるしかないところ。

ですから、町民の方が「行ってみたいな！」というまちづくりが欲しいですね。ちょっと覗いてみようかな…と思ってもらえるような、そういうまちづくりに関わっていただければと思っています。そういう情報提供ができるようになれば、そこからまた新しく始まっていくものがあるはず。そういうきっかけになるようなまちづくり——。これは自分の生きているうちにという無理もあるので、次の世代に引き継いでもらえるようにしていきたいですね。世代

を超えて計画していかないと。」(渡邊正義 帰町検討委員会委員長)

## 富岡町と福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定締結

2015年8月27日、「富岡町と福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定書」の締結が福島大学(福島市)で行われた。これは前年から、富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームと福島大学が連携して行ってきた、町内の歴史資料の救出・保全活動を長期的な取り組みとしていく上で、画期的意義を有していた。

この活動は、町にとっても、第二次復興計画の基本理念とも連動する不可欠なものであるという認識が深まっていた。しかし、スタッフ不足や知識・経験の乏しさなど、今後の継続に対する不安も大きかった。この協定書は、福島大学と富岡町という組織同士が活動の継続を約したもので、プロジェクトチームの職員た



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



遠藤 スズ子さん (下千里)  
[平成26年9月号]

### 自分らしさを取り戻すために

何が起きているのか分からないということが、これほど恐ろしいことだとは思いませんでした。震災発生時、富岡町内の交差点で赤信号のため、ちょうど停車しようとしたところでした。車体の揺れに、タイヤのパンクか車の故障かと思いましたが、自分だけではなく周囲も揺れ出し、地震だと認識するより先に恐怖でいっぱいになりました。

震災発生翌朝、近所の皆さんと車列を組み川内村へ向かいました。その後、田村市内や新潟県内を経て、長野県松本市内で暮らしている次男一家にお世話になりました。

夫は経営している会社のこともあり、数日の滞在を経て福島県内に戻りましたが、私は1か月ほど松本市で生

活しました。その後、相馬市内に住む妹一家のもとを経て、平成23年6月、夫が経営する会社の事務所にほど近い田村市内の借上げ住宅に移り現在に至っています。富岡とは違い山に囲まれ、冬は寒く雪が多い土地ですが、私は寒さをあまり気にしないほうなので苦にはなりません。

私は、避難により町を離れるまで、婦人会、三味線、民謡や童謡など、様々なサークル活動や習い事に参加していました。三味線などは一人でも練習はできますが、時には皆さんと集まって、話に花を咲かせる時間が楽しく充実していたものでした。避難後しばらく、以前のような活動はできませんでしたが、田村市に移って以降、富岡町民が比較的多く集まる郡山市やいわき市などで、そうした活動が再開されると聞き早速、連絡をとって参加させていただいています。

8月8日、いわき市で第33回いわきおどりが開催され、121チーム6千人を超える皆さんと「さくら富岡」チームとして、「どんわっせ」の掛け声と共に参加させていただきました。

生まれ育った故郷に戻りたい気持ちに変わりありませんが、仲間と少しでも楽しく前向きな時間を過ごしていこうと思います。



福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定締結



福大の学生による保全活動

ちにとっても心強いものであった。

「富岡町震災遺産保全宣言(2016年3月9日)や震災遺産保全条例(2017年3月10日制定)もそうなのですが、こうした活動を担当者個人の思いだけにとどめず、組織としてしっかり責任をもって継続していくかたちにしているところが、富岡町のすばらしいところだと思います。

文化財行政の現場では、その高度な専門性ゆえに、本来であれば担当者が長きにわたって実務経験を積んでいくことが望ましいのですが、実際には行政一般職と同じように数年で人事異動があり、短期間のうちに替わってしまうことがよくあります。そうなると、担当者が交替したことで、それまで盛んであった活動が急速に停滞してしまうことだって起こりうるのです。私たち大学の教員は同じところに長くいることが多いので、できればずっと活動を継続していきたいと思っていますが、自治体の担当者や組織の考え方が変

わってしまえば、どんなに続けたくても断念せざるを得ないことだってあるわけです。

富岡町はそういう先のことまで見越して、大学と協定を結ぶ、震災遺産保全条例を制定するなどのかたちをつくることで、担当者が替わっても活動が持続できるような仕組みを整えている。プロジェクトチームの中心となっている職員の方たちが周囲の理解と協力を得ながら、自分たちの理想を一步一步着実に実現させている。いずれも富岡町の優れたところだと思います。

長期避難による地域と住民の分断、歴史や文化の断絶、アイデンティティーの喪失といった危機感をバネに、富岡町が全国に先駆けて取り組んでおられる地域の歴史・文化遺産および後世に経験と教訓を伝える震災遺産の保全と継承の取り組みは、これからの日本の文化財行政を大きく変えていく可能性をもっています。もしそうなれば、震災・原子力災害

の被災地の経験が本当の意味で活かされることになるのではないのでしょうか。

「私たちもできるだけ長く富岡町を支援していきますので、今の協力関係が少しでも長く続くことを、そして私たちの活動に一人でも多くの町民が関わっていただけるようになることを心から願っています。」(阿部浩一教授)

2016年までの2年間で、町内の神社や旧家などから10,000点以上の歴史資料を保護し、同時に、震災資料を収集した歴史・文化等保存活動の成果は、このあと企画展「富岡町の成り立ちと富岡・夜の森」/「富岡町震災遺産展～複合災害とこれから～」の同時開催(2016年3月9日—14日/いわき明星大学)、企画展「ふるさとを想う まる つなぐ～地域の大学と町役場の試み～」(10月9日—31日/福島大学)などで披露される。そして全国で初となる富岡町震災遺産保全等に関する条例の制定(2017年3月10日)、ひいては富岡町アーカイブ施設検討会議(2016年7月15日設置)での検討を経て、富岡町のアーカイブ施設設置基本構想に関する提言(2017年10月30日)へと展開するなど、富岡町の地域資料保全・震災遺産保全の取り組みが続いている。



アーカイブ施設のイメージ

## 富岡の、富岡への、心をつなぐ！



## 全国公募して制定

## 富岡町公式マスコットキャラクター 「とみっぴー」

## 富岡町キャッチフレーズ 「未来へとつなぐ ひろがれ 富岡町」

「マスコットキャラクターを通じて、町民や行政、富岡を応援していただける方々が緩やかに繋がり、それぞれが自由な立場で町との接点を維持・創造していく」という趣旨のもと、富岡町は町のシンボル検討委員会を立ち上げ、2015年9月から10月にかけてキャラクターデザインを、11月にはその愛称と町のキャッチフレーズを全国募集した。

キャラクターデザインには総数399点の応募があり、里見節子さん（大阪府）の作品が、愛称は427点の応募の中から利光澄子さん（大阪府）の「とみっぴー」が最優秀賞に選ばれた。キャッチフレーズは342点の中から内河江美子さん（神奈川県）の「未来へとつなぐ ひろがれ 富岡町」が最優秀賞に決定、2015年12月14日に発表・制定された。

最優秀受賞者はすべて県外からの応募だったが、そのきっかけをたずねると次のようなコメントを寄せてくれた。

## ● キャラクターデザイン部門：里見 節子 さん（大阪府）

「富岡町の動画で山積みになったフレコンバッグを見て災害の深刻さを感じ、そこから何か協力できないかと思いました。」

## ● 愛称部門：利光 澄子 さん（大阪府）

「応募チラシの写真が魅力的で目を引かれて応募しました。震災前はこんなにきれいな風景だったのかと想像し、いつか富岡町に行ってみたいと思いました。」

## ● キャッチフレーズ部門：内河 江美子 さん（神奈川県）

「福島県には知人が多くおり、復興には大変関心がありました。少しでも復興の力になればと思い応募しました。」

2016年1月4日、郡山事務所で行われた町長年頭訓辞の席上、とみっぴーが初登場。続く10日の成人式にもお祝いに駆け付けたが、正式な町民への御披露目は1月22日の賀詞交換会で行われた。

以降、とみっぴーは、各種町行事への参加ほか「町ホームページ」「とみっぴー公式フェイスブックページ」「広報とみおか」「とみっぴーラジオ（ラジオ福島）」などの各種メディア、グッズ／アイテム類を通じて、災害復興計画（第二次）の策定で復興への歩みを本格化させた富岡町の情報発信と町民の思いをつなぐメッセンジャーとして急成長、とみっぴーの頭に鎮座する“ご先祖様”の教えも大きな力となり内外四方八方を飛びまわっている。



TOMIPIX

# とみっぴックス!

生まれたばかりの  
とみっぴー(応募作原画)



すぐにも飛び出しそうな完成度だったっぴ!

2016年4月9日  
とみっぴーと仲間たち



広野町のひろぼー(左)、  
友好都市・埼玉県杉戸町のすぎぴよんと  
おともだちになったっぴ!

2016年10月2日  
「ふたばワールド」(葛尾村)では  
ふなっしーとコラボ



4コマまんが  
「とんでけ!とみっぴー①」



とみっぴー新聞発刊!



広報とみおが2016年10月号は、  
とみっぴー誕生日記念企画  
特別号



とみっぴー  
Facebook



とみっぴー  
LINE スタンプ

2016年11月3日  
杉戸宿400年記念の  
杉戸町「宿場まつり」に飛んで行き  
古谷松雄町長にごあいさつ



2017年12月1日  
絵本「大倉山のとみっぴー」発刊



富岡町マスコットキャラクター

# とみっぴー



## プロフィール

愛称の由来	富岡町の幸せ(ハッピー)を願う想いを込めて「とみっぴー」。富岡町の想いを全国に発信し、元気にどこへでも飛んで行くキャラクターとして、親しみやすく可愛らしく!
デザインのモチーフ	富岡町の鳥「セキレイ」。頭には町の花「ツツジ」を飾っている。
生年月日	10月3日 午後
年齢	不詳
性別	(妖精なので) なし
性格	シャイ、寂しがりや、頑張りや、聞き上手
趣味	歴史・文化を学ぶこと、富岡町のみんなと遊ぶこと
好きな食べ物	ワタアメ
将来の夢	富岡町に再び灯りと人々のつながりを取り戻すこと
チャームポイント	どこへでも飛んで行ける羽、何か言いたそうな口ばし
生まれたところ	大倉山(おおくらさん) *
出没するところ	富岡町民が集まる場所

## ストーリー

遠い昔から、大倉山にはセキレイの妖精が住んでいた。妖精は、自然豊かな町とそこで暮らす人々が大好きだった。

桜の季節やお祭りの時などは山の上から、まれに町へ降りてくることもあり、子どもたちがほおぼるワタアメを羨ましく眺めたり、火祭りでは、「センドウ、センドウ」と山間に轟く勇ましい男たちの声に心躍らせ、森の友だちと真似をしたりして遊んでいた。とってもシャイな妖精で、人々の目に止まることはなかった。

ところがある日…、麓の町の灯りが消え、人々の声が消えてしまい、妖精はとても淋しくなった。今までで一番悲しいことだった。

そこで妖精は、町の灯りを取り戻すため、小さな翼で散り散りになった町の人々に会いに行くことに決めた。もう、シャイなんて言ってもらえない! みんなに会いに行くためには……

### \*大倉山(595.4m)

町中心部から真西、西の川内村、南の榎葉町との境界域にある富岡町の最高峰で、山頂に木花咲耶姫命が祀られ古くから地元の信仰の対象とされてきた。山の南側を東西に走る山道は「塩の道」と呼ばれ、昔は浜通りと中通りの交流の重要なルートだった。山の西側には大倉山森林公園として遊歩道等が整備され、ハイキング登山などで親しまれていた。山頂からは富岡町と太平洋を一望する。

山のみどりの呼び声に  
富岡川をさかのぼり  
満ちみちる季節のちから  
その生命の喜びをとりもどす





2016(平成28)年度

4月	9日	富岡町復興への集い2016	
	10日	本岡地区農業復興組合設立	
	14日	熊本地震が発生	
	17日	・町内下千里・沼名子地区の農地を保全管理していく農地管理組合が発足 ・富岡町消防団の春季検閲	
	19日	町立とみおか診療所建設開始	
5月	27日	オバマ米大統領が広島訪問	
	27日	第2回富岡町防災会議	
6月	1日	農業復興実施計画検討委員会設置	
	8日	副町長が2人体制に	
	20日	副町長が2人体制に	
7月	4日	環境省 帰還困難区域の枝並木等除染計画を示す	
	6日	復興拠点として位置付けた曲田地区で、災害公営住宅の起工式を実施	
	7日	町内曲田地区で災害公営住宅の安全祈願祭	
	11日	町除染検証委員会がフォローアップ除染後を徹底調査実施	
	15日	富岡町アーカイブ施設検討町民会議設置	
	21日	町内帰還環境の現状を評価する帰町検討委員会が第1回の評価を町に提出	
	27日	「富岡復興メカソーラー・SAKURA」起工式	
	31日	平成28年度町政懇談会(東京品川区)	
	8月	3日	平成28年度「とみおか絆の集い」
		5日	リオデジャネイロ五輪開幕
6~7日		平成28年度町政懇談会(いわき市・郡山市)	
8日		「象徴としてのお務めについての天皇陛下のお言葉」	
中旬		帰還困難区域内一部先行除染開始	
31日		国が「帰還困難区域の再生に関する基本方針」を提示	
31日		国が「帰還困難区域の再生に関する基本方針」を提示	
9月	1日	平成28年度富岡町敬老会(郡山市)	
	8日	平成28年度富岡町敬老会(いわき市)	
	10日	麓山神社の復興記念式典	
	15日	富岡消防署臨時拠点24時間常勤体制開始	
	17日	帰還開始に向けた準備宿泊開始	



21日 東電と政府、農林業の賠償の方針を提示

### 3 帰町開始への助走 ——町内生活基盤の復旧整備が加速

平成28年度 2016.4.1-2017.3.31

#### 特例宿泊から準備宿泊へ — 高まる行き交い

前年度3月の「帰町計画」策定直後、春の彼岸に合わせて初めて実施された「特例宿泊」には22世帯35人が参加し、5年ぶりのわが家で思い思いの夜を過ごした。遠ざかってしまった町が少しずつ近づいてくる、その足取りを、町民も感じ始める。国道6号をはさんだ東西の曲田・岡内両地区を中心に、復興先駆け地区での町内整備に拍車がかかり、工事関係者ばかりではない人の姿、車の出入りが目に見えて増えていった。

除染検証委員会、帰町検討委員会など帰町にむけての評価活動とともに、防災会議や農業復興実施計画検討委員会など、その先に向けての必要な準備と整備が進められていく。

こうして“帰町”への取り組みが本格化していたさなかの8月8日、「象徴としてのお務めについての天皇陛下のお言葉」(ビデオメッセージ)がテレビ放映された。国民の思いに寄り添うことを全身全霊をもって果たすことを象徴の務めの一つと考え、全国に足を運びつづけてきたとのお言葉は、災害復興計画(第二次)策定を通じて何度も確認しあった町民一人ひとりへの寄り添いの基本と響き合って、その言葉の意味の重さをあらためて思い起こさせてくれるようだった。また、平成の足取りを感銘深く振り返らせてくれるながら、私たちが直面している言い尽くせない苦難が決して私たちだけのものではなかったことにも思い至らせてくれるようだった。

一般会計当初予算 198億6千万円、特別会計予算を合わせた総額 279億6千万円と過去最大を更新する予算編成で臨んだこの年、町は「富岡町の発展を見据えた“心”と“ふるさと”再生の加速化」を基本に3つの取り組み方針を掲げた。

#### 1. ふるさと富岡での生活を見据えた環境作りの加速化

- ・放射線情報システム構築などの除染及び放射線管理事業
- ・JR富岡駅周辺整備などの生活インフラの整備事業
- ・復興拠点整備事業
- ・学校機能回復や福祉施設等の復旧など教育・福祉体制構築事業など

#### 2. 町民一人ひとりの心の復興に向けた生活と誇りの再建

- ・既設事業に加えての避難生活支援事業
- ・「第3の道」アクションプランの

作成

- ・復興まちづくり会社の設立
- ・震災の記録等の収集・保存・伝承
- ・タブレット端末等の情報発信の充実 など

#### 3. ふるさと富岡の発展を支える産業と交流基盤の再生

- ・複合商業施設整備などの商業再生や農林水産業の支援
- ・富岡工業団地の拡充、企業誘致の強化などの新たな産業基盤形成事業
- ・文化交流センター「学びの森」の機能回復など交流基盤の再生事業 など

引き続き特例宿泊が実施された4月、帰町して生活するための絶対条件ともいべき医療体制の拠点として「町立とみおか診療所」建設が着工、10月1日の開所となる。

5月にはふるさと生産組合が、町内下郡山原下地区の水田でこの年で



ガンマ線可視化カメラによる住宅地での線量測定

3年目となる実証栽培の田植え、6月には農業復興実施計画検討委員会が設置されるなど、各地区の農業復興組合の設立、農地保全作業などとも相まって営農再開への取り組みにも本腰が入ってゆく。

にぎわいづくりの中心となる複合商業施設には「ヨークベニマル」「ダイユーエイト」の出店が決まり町との協定が結ばれるなど、復興拠点の

形もみるみる具体化していった。こうした加速につれて役場業務も増大したため、6月20日から副町長が2人体制となる。

曲田地区に整備される災害公営住宅の工事が始まっていた7月21日、帰町検討委員会は町内への帰還環境の現状を評価する第1回の報告を町に提出した。これは3月に策定した「富岡町帰町計画」に示された「帰還

に関する考慮要件」に基づいて行った帰還環境の現状評価で、内容は『町民のニーズに柔軟に対応し生活環境を・充実させる、特に局所的に線量が高い箇所の再除染追加除染は実効性のある確実な対応を求める』もので、帰還困難区域についても、将来展望ができるような環境回復への早期対応を求めている。

除染については、この評価に先だって5月20日、除染検証委員会が第2回となる中間報告を提出。この中で、除染対象地域全体の空間線量率は除染前に比べて約54%まで低減したが、未実施箇所や除染後も線量が高い箇所があることなどが課題として、次の4項目の緊急提言(第2回)を行っている。

#### 富岡町除染検証委員会緊急提言 (2016.5.20)

- 1) 居住制限区域と帰還困難区域の境界付近の空間線量率低減  
(生活圏の空間線量低減及び町民の不安解消の観点から、帰還困難区域側の相当程度の範囲の除染を早急に実施する必要がある。



### 広報とみおか 桜通信 [抄]



先崎 梨花さん (夜の森駅前南)  
[平成28年5月号]

#### 笑顔で再開できた 成人式に感謝

卒業式を終え、高校が始まるまでの間、中学生として最後の思い出づくりに何をしようかと考えていました。しかし、その当日に被災し、翌日から原発事故で町外避難となり、卒業式が中学生生活だけでなく、富岡町で最後の思い出となってしまいました。

町を離れてから、一時、郡山市内の親戚宅に身を寄せました。しかし、いつまでもお世話になるわけにもいかず、郡山市周辺で避難所として開放された宿泊施設などを家族で転々としました。私の進学予定先は町内にある富岡高校で、進学がどうなるのか心配でしたが、避難中の生徒に対する特例措置により、あさか開成高校に入学しました。

高校入学後、2年の1学期まであさか開成高校に通い、同2学期からいわき市内で開校している富岡高校に転入しました。郡山市内で生活している家族の元を離れ寮生活となり、数か月間在学しましたが不慣れな生活で心身ともに疲れてしまい、再び家族の元に戻り、郡山市内の高校に再転入しました。

高校に入学してから落ち着かない日々を過ごしましたが、あっという間に3年生になり、進路を選択する時期を迎えました。私は子どもに接するのが好きなので、子どもに関わる仕事に就きたいと思い、高校卒業後は仙台市の専門学校に入学しました。

今年1月の富岡町成人式では新成人の一人として出席するだけでなく、実行委員として関わりました。実行委員会は、富岡一中・二中それぞれの卒業生から構成されますが、会の立ち上げにあたって、私を含め複数の卒業生に声が掛かったそうです。二中からは私一人でしたが、一中の皆さんにもいろいろカバーしていただき、式や懇親会などをスムーズに進めることができました。開催当日までいろいろ大変なことはありましたが、中学卒業以来5年ぶりに同級生やお世話になった先生方とお互い笑顔で再開でき、今は実行委員を引き受けて良かったと思っています。



除染検証委員による現地調査



これまで15回行われた除染検証委員会

帰還困難区域全体の除染実施計画の早期策定も急務)

2) 徹底したフォローアップ除染の実施

(多数存在する局所的高線量箇所の徹底除染。特殊舗装についての舗装打ち替えも含めて効果的かつ合理的な追加除染の必要)

3) 森林除染による空間線量率の低減

4) 土壌調査の結果を踏まえた農地等の追加除染

(濃度が高い土壌の追加除染。作付の品種により放射性物質の移行係数は違うが、どんな作物を栽培しても確実に基準値未満になるよう徹底した除染が必要)

この緊急提言を受けて、町と町議会は政府にかさねて要望書を提出していたが、帰町検討委員会による評価は、これらをさらに町民の立場から一人ひとりの意向に応じ、より徹底して実施することを求めたものだったといえる。

「除染は国、環境省で実施しますが、完了しましたと言っても抜けているところがあります。それを現場に行って線量の測定器を当てながら検証するわけです。

例えば、雨が降ると水が枝から幹を通り、木の周辺が高くなることを今なら皆さんわかっているけれども、当時はなかなかそういうことすらわからない。感覚的に持っていませんでした。

そういうことを現場で検証確認して、ここはただ草を取っただけでは土の中に固定化されるのでダメ、土ごと取っていかないと線量は下がらない——ということを委員会で検討

しながらやっています。役場に、このようなところは高くなりますよということを示しながら、役場は役場でちゃんと動き、環境省も独自にいろいろ情報を得ながら、ホットスポットを見つけてはそれをつぶしていく。それが除染の徹底ということなんです。

とはいえ完全になくすることはできません。よく言うのですが、放射能がなくなるものというのは、半減期しかないわけですね。だんだん数字が下がっていくような。

それに、除染をどこまでやるかというのは、実は結論がなかなか出ない問題です。いわゆる1mSv(ミリシーベルト/年)という基準がありますが、では0.23μSv(マイクロシーベルト/h)に対応しているのですかということ、明確な答えは誰も出せないのです。

いずれにしても、なるべく低くさせる。そのためには効果的な除染、ホットスポットはなるべく少なくしていくということです。

あとは、表土を剥げば下がることはわかっているわけですが、それをゼロにするとなると、ただ除染土壤が増えるだけになって中間貯蔵があふれてしまう。実際に測定してみると、3cm剥いだ場合と5cmの場合ではあまり変わらないことがわかりました。だったら後始末のことを考えて、そういう科学的な根拠を踏まえて、どこまでにしようとか。検証といいながら、見極め作業のようになるわけですね。

そのほか問題は、森林除染をどうするかとか、ため池はどうするかとか、そういうことも議論の中に入ってきます。なかなか結論は難しいと

富岡町  
復興・再生のあゆみ

2016(平成28)年度

9月 29日 富岡町立とみおか診療所開所式



30日 ・放射線に関する不安の解消に向けて長崎大学との包括連携協定締結  
・とみおか放射線情報まとめサイトオープン

10月 1日 町立とみおか診療所が診療を開始

11日 複合商業施設の名称が「さくらモールとみおか」に決定

16日 富岡消防団の秋季検閲

24日 町災害公営住宅第2期分の基本協定締結

25日 ・国が「平成29年1月の避難指示解除」を提案  
・人と町とのつながりアクションプラン策定

26日 交通環境の充実に向けて、路線バス運行に関する協定を締結

11月 1日 復興公営住宅「平沢団地」入居開始

2日 平成28年度富岡町戦没者追悼式・慰霊祭

5日 平成28年度町政懇談会開催(下期)

24日 国が「平成29年1月の避難指示解除」案を取り下げ

25日 複合商業施設「さくらモールとみおか」一部オープン

12月 19日 米大統領選でドナルド・トランプ当選

1月 8日 平成29年富岡町成人式

10日 国が「平成29年4月1日の避難指示解除」を提案

12日 「富岡町サポートセンター平沢」開所



13日 避難指示解除にかかる行政区長会及び住民説明会(全5回)

18日 富岡町災害公営住宅(第二期)建設工事開始

20日 トランプ米大統領就任

29日 避難指示解除にかかる住民説明会開催

2月 7日 国に対して復興に向けた緊急要望

17日 宮本町長が「本町の一部の避難指示解除時期を平成29年4月1日とする」と判断

ころがあります。

森林も、家があれば家の周辺の里山的なところの20mや10mを除染します。そういうところも実際に行ってみて、もう少し取ればもっと下がるところを、委員会から「ここはもっとやったほうがいい」ということを町を通して環境省に要望していくこととなります。

問題は夜の森地区ですが、あそこは家がすごく多いわけです。それで道路を1つ隔てて、こちらは解除しましたがこちらは帰還困難区域だから除染もしませんという話はないわけです。ここは解除したから住んでもいいですよと一方で言いながら、道路ひとつ隔ててフェンスがあり、こちら側は全然やっていない状

況。これは実際に皆でその家に行き、こんなことはおかしいよねという話になるわけです。

それを提言の形で町長さんに出し、町から環境省に申し入れをして、少なくとも20mは帰還困難区域側だけでも先行的にやりましょうというところに結び付いて行ったということです(除染検証委員会 河津賢澄委員長)

町からの要望を受けて7月、帰還困難区域の桜並木と夜の森公園、桜並木への主要接続道路の端からおおむね50mなどの一部除染実施計画が環境省から示された。8月末から、先行して居住制限区域との隣接部からおおむね50m範囲の除染が開始されたが、町ではさらに帰還困難区域

全体の除染を要望している。

除染検証委員会による検証は今も(2018年11月現在)も続いているが、2016年10月4日には総括的な報告書を提出、早期帰還を望む町民のための環境回復は概ね達成されているとした。この報告書は「富岡町帰還検討委員会」での、「2017年4月1日避難指示解除」受け入れへの大きな判断材料となった。しかし、この総括報告書にも「町民の安全安心のための提言」が盛り込まれており、あくまでも町民の気持ちに寄り添った真摯で丁寧な施策の継続を除染検証委員会は求めている。

## 富岡町の 皆さんと 共に

MESSAGE



齊藤 紀明さん

福島県 生活環境部  
生活環境総務課 企画主幹

2013年10月1日から2017年  
3月31日までの3年6か月、  
富岡町副町長を務める。

大学を卒業し社会人になりたての私の生活は富岡町から始まりました。2年間過ごした岡内の新築アパート、残業帰りに立ち寄ったコンビニ、仲間と利用した近所の居酒屋。そして何よりも、澄み渡った青い空に遠くまで映える満開の桜、そこに集う人々の笑顔。若かりし頃の大切な思い出がたくさん詰まった町でした。

その町が震災・原発事故災害の中から本格的な復興へと立ち上がろうという時に副町長という重責を担うことになるとは——その奇縁を感じながら務めさせていただいた3年半でした。ちょうど汚染水の問題が深刻化するなど、原発事故後の大きな混乱がまだまだ続いているさ中の着任から、第2次災害復興計画の策定、復興拠点の具現化、そして帰還時期の判断へと、宮本町長始め役場の皆さん、そして、町民の皆さんとともに全力で打ち込んだ日々は、生涯忘れ得ぬものとなりました。

町民と役場若手職員で構成された検討委員会での100時間に及ぶ議論を経て、どの道を選んでもつながり続けられる町という理念を打ち出した第2次災害復興計画。想像力あふれる議論と会議室の熱気が今でも鮮明によみがえります。私と同年代の方も多く、仕事を離れての交流も含めいろいろな話を聞く機会にも恵まれ、その後の復興事業の構築にもつながる多くのアイデアやヒントをいただきました。

この他にも、言葉に尽くせぬほどの実に

様々な場面で、「古里を何とかしたい」、「富岡町が好きだ」という強い思いを持ちながら、困難な中であっても前を向いて進む多くの町民の皆さんの姿に幾度となく感銘を受け、勇気や元気を分けてもらったことを思い出します。改めて振り返ると、富岡町の強みはたくさんありますが、もっとも誇るべきは何と言っても「人(町民)」であると考えます。

副町長退任後も行政に携わる者として噛みしめているのは、あの時に築かれた役場と町民の皆さんとの関係、真の協働を、ぜひ活かし続けて欲しいということです。役場は批判の対象であってはならないと思います。むしろ「役場はなかなかやるね」「自分たちの取組やアイデアが活かされた」と感じてもらう。その積み重ねと信頼関係が、次の世代につながる町の大きな原動力や一体感を生み出すと思っています。そして、これまでの富岡町の復興に向けた歩みも、そうやって町民の皆さんと一緒に形にするとすることを積み重ねてきた結果であると信じています。

震災・原発事故から8年が経過しますが、帰還困難区域の再生を始めまだまだ課題も多く、復興の道りは決して短くはありません。しかし、その歩みは着実に前に進んでいることを実感しています。立場も変わり少し離れたところにおりますが、私にとって第二の古里である富岡町の復興にこれからも関わってまいります。また皆さんとお会いできる日を楽しみにしていますので、その時は、是非お声かけください。



館山荘デイサービスセンターもとまち



ふたば医療センター附属病院

**町民の安全安心のための提言**  
**〔富岡町除染検討委員会報告書〕**  
**2016.10.4より)**

○町内放射線量モニタリングの実施と公表

・町民の安全安心のため、町内の空間線量調査や土壌調査等の結果については継続的に実施し、解りやすく町広報紙やホームページ等を利用し公表することが必要である。

○被ばく線量管理体制の構築

・町が所有する個人積算線量計等を活用し、継続的な町民の被ばく線量管理を実施し、長期的な町民の健康を見守っていくことが重要である。

○相談窓口の設置及びリスクコミュニケーション活動の推進

・放射線に関する相談窓口を設置し、町民からの相談に対して常に真摯に向き合い、町民の立場に立った丁寧な対応が求められる。  
 ・定期的に放射線に関する「学習会」や「座談会」等を開催し、町民の放射線に関する知識の向上や理解促進に努めることが重要である。

**健康で安心して暮らせるまちづくりの先駆け——町立診療所**

町が、町民が、長い避難生活を強いられた要因のひとつは、健康に安心して暮らせる環境を奪われたことだった。町への帰還は、かつてあった生活のためのライフラインの復旧は当然のこととして、除染の効果とともにその環境が整備されたと認め

られることが最大の条件となる。ある意味では、かつては当たり前だった以上の入念細心の健康・安心への施策を必要とする。2016年3月に策定された行動計画「富岡町保健・福祉アクションプラン」はその重点事業として、次の12事業を優先的実施に掲げていた。

- (1) 町立診療所の整備
- (2) 双葉郡内への二次救急医療拠点の構築
- (3) 高齢者等復興共同住宅の整備
- (4) 養護老人ホーム、特別養護老人ホームの再開
- (5) 館山荘デイサービスセンターもとまちの再開
- (6) 居住介護事業所(居宅介護サービスの再開)
- (7) 放射線に対する相談窓口の設置
- (8) 地域包括センターの設置
- (9) 帰町者の見守り体制づくりの構築
- (10) 日常生活支援事業の実施
- (11) 福祉・介護を支える人材育成
- (12) 子育て支援拠点整備の推進

(1)(2)は町民の特例宿泊や準備宿泊(9月17日開始)の実施とともに、早急な整備が求められていた医療体制の確保だ。

10月1日、その先駆けの「町立とみおか診療所」が診療を開始する。所長には、町内唯一の病院として地域医療の支えとなっていた今村病院の院長だった今村論医師が就任。初日から救急患者が相次ぐなど、医療が再生した心強さと安心を印象づけた。入院や手術が必要となる患者に対応できる二次救急医療施設については「県立ふたば医療センター附属病院」の整備が決まっており(2018年

富岡町  
復興・再生のあゆみ

2016(平成28)年度

2月 23日 富岡町農業アクションプラン策定

3月 1日 富岡駅前交通広場供用開始  
 県立富岡高等学校で、休校前最後となる卒業式



6日 富岡町役場本庁舎順次再開  
 10日 原子力災害対策本部会議で「居住制限区域及び避難指示解除準備区域の避難指示解除」が決定  
 11日 平成29年 富岡町東日本大震災慰霊祭



23日 富岡町大玉仮設診療所・仮設店舗 開所式  
 30日 「さくらモールとみおか」グランドオープン



31日 双葉警察署本署機能を富岡町に移転  
 富岡町災害公営住宅(第一期)の竣工式



自主避難者への住宅無償提供打ち切り



町立とみおか診療所診察室

4月開院・24時間365日対応)、富岡町は新たに双葉地域医療体制の拠点に位置づけられることとなった。

「町からは診療所の話の前に、今村病院再開の依頼を受けたことがありました。しかし資金や人員の面から無理で、お応えできませんでした。とはいえ、かかりつけだった方から“先生の胃腸薬でない調子悪いので教えて”とか“こんな症状なんだけれどどうすればいい？”、“先生

どこにいるの”などの電話をいただき、待っていてくれる人がいることを痛感しました。また“一生診てくれ”と頼ってくださっていた方との関係を断ち切られたという無念さもあり、町に戻る方法を模索していました。そこにあらためてこの町立診療所の打診がありましたので、ふたつ返事でお受けしました。事業委託というかたちで運営させていただいています。

10月1日9時の開院と同時に救急

車が入ってその処置からの診療開始となり、遠くから一番乗りで来てくださっていた元患者さんを待たせることになってしまいました。町の現状と一人で診察していく問題など、初日から考えさせられました。

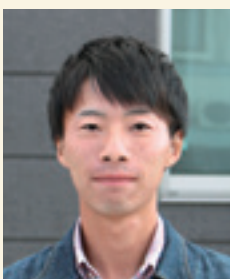
とはいえ、“先生が来たので、それだけで安心して血圧が下がったんだ”なんて言ってくれる人もいます。今村病院での20年間の付き合いがあって、お互いに知っている。自分の体のことを全部知ってくれている、という感じで言ってくれたりする人が多いので、皆さんの安心になっているのかなという気持ちでやっています。

多少遠くから、いわきとか郡山とかに避難していながらも、一時帰宅しながら受診してここでお薬をもらっていった方が、よそで一から説明しなければならないというよりはいいのかな、と。

それともう一つ、ここにいいタイミングで診察に来ると昔なじみの人と会えたりするので、話に花が咲く。そういうサロンのような役割も大きいかなと(笑)。



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



山口 健太郎さん (西原)  
[平成28年11月号]

### 得意分野で、故郷の復興に貢献したい

震災当日に中学校を卒業し、その翌朝、原発事故による避難指示で、まるで追い立てられるように富岡を離れました。県内を転々とした後、郡山市内の親類宅に身を寄せました。

避難する数日前に、志望していた県立原町高校の入学試験を受けたため、しばらくしてから合格していることを知りました。原町高校のサテライト校は郡山市内にも開設されることになりましたが、他校に間借りするため肩身が狭い思いをするのではという心配があったため、県立郡山高校の編入試験を受験し、約1ヵ月遅れで高校生活が始まりました。

当初は学校に馴染めるか不安でしたが、同級生たちは

区別なく迎え入れてくれました。また、原町高校入学予定だった同級生もいて、同じ境遇同士、心強さのようなものを感じました。

部活動では中学時代から続いていたテニス部に入学し、2年生の時に部長を務めました。先の見えない避難生活による不安から始まった高校生活でしたが、幸い、同級生をはじめ仲間に恵まれたこともあり、無事に卒業まで過ごすことができました。

平成26年春、高校を卒業して日本大学工学部機械工学科(郡山市)に入学しました。中学・高校と取り組んできたテニスも続けています。子どもの頃から物作りや自動車などに興味があったため、この学部に進みました。今年は3年生になり、より専門的な勉強をするため、計測・診断システム研究室に所属し、工作機械や3Dプリンターについて勉強しています。

今年、成人式を迎えました。避難後5年ぶりの再会となった同級生もいましたが、互いに頑張っている様子を感じることができました。将来は機械メーカーへの就職を希望していますが、それが直接的に富岡の復興に結びつくものかは分かりません。しかし、仕事を通して少しでも社会に貢献しながら、故郷に思いを持ち続けることが、私なりの復興に寄与する姿なのかと思っています。

逆に言うと、病院をやっていた頃は忙しくて、診察をして必要ならば検査をして帰っていただくということで、そんなにお話できない、時間を取らない診察でした。それが今は時間があるので、ゆっくり避難中の話とか、ほかの家族の人はどうしているのとか、お話ができるようになってきている感じです。

開院して2年の現在、診察に来られるのは一日40～50人でしょうか。その3分の2は工事など作業の人たちの健診で、残りが普通の診察です。内容的には、交通事故や労災。町民の方については高齢者夫婦や単身の人が多いので、2週間処方として服薬管理、安否確認をするようにしています。

問題なのは、やはりどちらかが体調が悪くての老老介護とか認知症介護、物忘れが出ているとか、熟年離婚とか…。

とかく様子を見続ける必要がありますので、町の見守り隊などの方々も含めて協力し合っています。

もう一つの問題は、無床診療所だということです。昔の病院の時だったらちょっと具合が悪くて変だなという場合は入院でケアして、合併症を見つけたり、必要に応じて治療をして帰ってもらうことができました。今はそれができないのが大きな問題です。ちょっと肺炎みたいなので、本当は入院して休みながら朝晩点滴した方がよさそうなんですけれど、明日も様子みながら点滴に来てねーっといった、綱渡りまではいかないのですが不安を持ったまま診るといことが多くなってしまいました。

子どもたちの姿もやっと戻ってきました。もともと私は小児科も診ていました。病院をやっていると、夜間の救急はほとんどが子どもさんで、熱を出したり、喘息がひどくなった子どもさんを診ていました。だから家族全部、お孫さんから、娘さん、ご主人、おばあちゃん、おじいちゃ



町立とみおか診療所

んまで家族で診ていたので、皆さん違和感なく来てくれています。

ふたば医療センター附属病院ができましたので、これで病院を再開する道は断たれたと実感して、診療所で頑張ろうと決意しました。医療センターなどと連携して、ここで一次医療に全力を尽くす、そのことが町の人々の安心になればという気持ちでやっています。(町立とみおか診療所 今村論所長／2018年11月談)

## 帰町判断 大詰めへ

10月4日、除染検証委員会は町内の除染状況及び放射線量の現状と評価を取りまとめた報告を町に提出する。町内の除染の効果を「早期帰還を望む町民の環境回復はおおむねなされている」と確認する一方で、「年間追加被ばく線量1ミリシーベルト以下」を目指すフォローアップ除染の継続や、相談窓口の設置など町民の安全・安心につながる理解促進活

動の実施を提言していた。

同21日、帰町検討委員会もこの年7月以降の町の取り組み等を評価する第2回評価を町に提出した。早期の帰還を望む町民のための町内環境と「帰還開始」の準備は、おおむね整っていると評価。ただし「帰還開始」が復旧・復興の終着点でなく、多くの人々が安全・安心に交流して生活していくためにさまざまな課題の解決に取り組むことを提言した。

また、公募で名称が「さくらモールとみおか」と決まった公設民営型複合商業施設の一部オープンが11月25日に決定。ダイユーエイト、地元飲食店(いろはや、浜鶏、おふくろフード)、ATMの営業開始が予定され、帰町判断の材料が揃いつつあった。

こうした推移を見取って、10月25日、政府(内閣府原子力災害現地対策本部)は、町議会全員協議会の席上「富岡町の居住制限区域・避難指示解除準備両区域についての解除を2017年1月中としたい」との案を提



避難指示解除にかかる住民説明会開催

示する。町が目指すとしていた「早ければ2017年4月」の解除(帰還開始)を3カ月前倒しするもので、根拠として町立診療所の開所、上下水道の復旧などとともに、両区域での追加除染が1月に完了すること、町除染検証委員会の報告、町帰町検討委員会の評価などを挙げていた。

しかし、議員らからは「1月には町役場の復旧が終わっていない」「追加除染の結果が示されないうちは帰還の判断がつかない」など、1月解除は時期尚早とする意見が相次いだ。宮本町長は、あくまでも「国の考えであって、町とすり合わせていない」とした上で、「ぶれることなく(4月解除に向けた準備を)粛々と進めていきたい」と取めた。

翌月、国はこの提案を取り下げ、年が明けた1月10日、「4月1日解除」を再提案。町は2月17日、「本町の一部の避難指示解除時期を平成29年4月1日とする」との判断を行うこととなる。町民からは、なお時期尚早の声があることを認めながらも「本日に至るまでの様々な議論を踏まえ、町内の生活環境が一定程度以

上の状態になっていること、一刻も早く、ふるさとでの生活を望まれている方々がおられること、避難指示解除後においても国の支援の継続を約束する町・県・国の三者による合意文書を取り交わすこと、そして何よりも、これ以上の避難指示の継続が、ふるさとを未来につなげていくことをより困難にするものと考え」判断に至った、と宮本町長は理解と協力を求めた(広報とみおか 2017.3月号)。

### 「第3の道」への挑戦—— 「人と町とのつながりアクションプラン」策定

帰町に向けた準備の成果が次々に目に見え始めた10月25日、「人と町をつながりアクションプラン」が策定された。富岡町災害復興計画(第二次)の重点プロジェクトを実現するための3つ目の行動計画となるこのアクションプランは、災害復興計画(第二次)でとらえた新たなまちづくりへの豊かな潮目ともいうべ

き「第3の道」からの発展の可能性をいかに富岡町の未来につながるものとして実現していくかの実行計画で、その災害復興計画(第二次)をつくりあげた町民と町との協働の創意と熱意をどう持続し、未来のまちづくりに生かし、展開していくか、その仕組みを実現する意欲的な挑戦ともいえるものだ。

その内容には「町民の"心"の復興」と「ふるさと富岡」の復興」は表裏一体のものであることを見定めつつ、町外で生活せざるを得ない町民一人ひとりが選ぶ道を尊重しながらその生活サポートを継続し、町とのつながりを保ち、町内外を問わず富岡を想うすべての人々の力を"ふるさと富岡"を未来につなげていくための取り組みが具体的に示された。

#### 基本方針と取り組みの柱

##### 1. 町外生活サポート

###### ○町外生活の総合サポート

- ・各種証明書のコンビニ交付システム
- ・町外拠点(窓口業務)などの継続と充実



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



木谷畑 一正さん (杉内)  
[平成28年4月号]

### 故郷のパトロールを 通して思うこと

悪いことをしたいという気持ちはさらさらありませんが、皆さん以上に「悪いことはできない」と思っています。なぜなら、双葉郡内をはじめ福島県内にもほとんど存在していない姓(苗字)だからです。子どもの頃から、冗談混じりに「木谷畑なんて他にいねえんだがら、オメエはワリゴド(悪いこと)できねんだ」と言われてきたせい、無意識のうちに「モラルハザード」が常に働いているのかも知れません。

私の自宅は杉内で「コウロ」と呼ばれる場所の近くにあります。子どもの頃、木谷畑姓は岩手県など東北北部から先祖が移り住んだことが始まりと聞かされたことがありました。

震災後、ある方との話の中でコウロという地名は「高炉」

で、かつて新福島変電所南西側にある山から採掘した鉾石をもとに製鉄していたのが由来と聞きました。明治維新の前後に南部藩から「コウロ」に移住者がおり、当家のルーツについて、これまで聞いたことがある話と一致する歴史的事実があることが分かりました。

また、昨年と今年の大震災周年日に合わせて、千葉のFMラジオ局の番組に出演し、私たち被災者と故郷について話す機会がありました。原発事故により故郷は失われたままという生の声を、原発で発電された電気の消費地であった首都圏の皆さんに、少しでも届けられたかと思えます。

ヨモギダ設備(株)富岡営業所に勤務していた私は、町内王塚地区でガスボンベの交換作業中に大地震に遭遇しました。町消防団第4分団第1班長として発災直後の対応に始まり、避難指示による町民の誘導、避難所の運営などの活動にあたりました。

避難区域の再編以降、消防団の町内のパトロール活動に参加しています。避難前、恵み多い故郷を当たり前と思っていたのですが、原発事故の悲惨さ、一度失った故郷に再び人の営みが蘇ることの難しさについて、パトロールの道中、改めて感じさせられています。



- ・コミュニティ活動支援
  - ・安定した住まいへの移行サポート
  - ・生業(町内外での事業再開や就業をサポート)
  - ・寄り添い(見守り・健康づくり・子育て)など
- 放射線に対する健康サポート
- 町内不動産の利活用サポート(町内の土地・建物の環境回復や利活用などを総合的にサポート)

2. 「富岡とつながる“ふるさと”づくり」  
町内に「住む」「住まない」を問わず富岡を「活動」のフィールドとしてにぎわいがふくらむような取り組み、環境整備を進める。

- ふるさとへの関心(ネットメディアや「広報とみおか」による情報発信・とみおかアーカイブ事業による発信)
- ふるさとへの参画・交流(あらゆる人々が富岡で活動し富岡を応援できる環境を整える)

富岡町復興への切実な思いの開花を予感させる町民の心の凝縮といふべき意欲的なこれらのプランは、すでに実施されていたことの継続・充実ともに、俯瞰して見れば、少子高齢化のなか未来を模索する地方自治体の可能性を切り開く先進の思考を促していた。かつて無い未曾有の災害を克服する、かつてない発想への促しだ。

町内資産の有効活用のための「空き地・空き家バンク事業」もスタートした2017年1月、「一般社団法人とみおかプラス」の設立総会が開かれた(1月16日)。これは「富岡とつながる“ふるさと”づくり」の中心を担うべく、町のバックアップにより町内諸団体、金融機関などで構成・設立された民間主体の組織で、富岡を想うすべての人々の力の受け皿となるものといえた。内外の人と人・人と町とのつながりを土台とした未知のプラス創造、富岡の新しい魅力づくりとともに、「人と町とのつながりアクションプラン」の心臓部を担うことが期待された。



富岡町大玉村診療所開所

## 地域医療と住民の食を支えた活動に区切り 富岡町大玉仮設診療所・仮設店舗が閉所

帰町開始は4月1日との町判断が発表された2月、「富岡町農業アクションプラン」が策定され(2月23日)、復旧・復興に向けた4つのアクションプランが出揃った。

3月1日、最後のバドミントン部員の卒業とともに富岡高校が休校。3月6日、役場本庁舎での業務が順次再開。そして震災からまる6年を迎えた慰霊祭――。

また、3月23日、富岡町の長い「避難」に大きな区切りをつけるべく大玉村の仮設住宅地にあった富岡町大玉仮設診療所と仮設店舗「富岡えびすこ市・場」が閉所の時を迎える。診療所はビッグパレットで診療を行っていた医療班が、2011年夏から活動を開始、仮設店舗は2012年春に開店、ともに仮設住宅に入居した避難町民だけでなく人々の大きな支えとなり、親しまれてきた施設だった。

### 富岡町大玉仮設診療所の5年8か月

医療班の活動開始を追って2011年10月に開所となった仮設診療所は、井坂晶医師、堀川章仁医師、佐藤正憲医師、新妻学歯科医師の4人で診

療をスタート、富岡町民はもとより、大玉村地域住民の心と体のケアに当たってきた。

その中心的な存在で、帰還開始とともに帰町し、自宅だった場所に富岡中央病院を再建した井坂晶院長は「現在の診療姿勢は仮設時代に考えたことの継続」と語り、5年8か月間に及んだ現地での活動をふり返る。

「基本になっているのは、ビッグパレット内の避難所で診療したボランティア医療班です。その活動のおかげで、あの場で亡くなった方はいませんでした。それを仮設住宅・復興住宅に入ってもつなげて、途切れない医療支援をしていかなければいけないという考え方がありました。

大玉村は一番大規模な仮設住宅でしたが、はじめの2年間でも誰一人死者は出ませんでした。聖路加病院のボランティア訪問看護チームのおかげです。しかしそのチームがお帰りになったあと、住民の方々も慣れてくるなど見回りがあまり行き届かなかったお正月に、死者が出てしまいました。その後も何人か、そういう形で出たのが残念でならないです。

いま、復興住宅に入った町民の方々について同じ心配があります。復興住宅に移って、条件がもっと悪くなったと私は見えています。というのは、見回りもそれほどしっかりと

きない状態で、ましてや1戸建てなら玄関先や庭先から状況がうかがえるわけですが、3階建ての鉄筋コンクリートの復興住宅に入ってしまうと、消息が全然つかめない。拒否する方もいたりして、健康状態を把握することは無理。それで具合が悪くなってしまった方も何人かいます。孤独死とか自殺なども心配です。

そういう状況をどうしていったらいいのかが、自分のジレンマもあるのですが、帰ってきた方々で希望する方には往診をして、必要な処置と見回りをしています。しかし、なかなか全部に行き届くわけにはいきません。いま往診ができるのはここだけですが、私一人では無理だし能率の悪い仕事ですから人手は足りない。見回り隊で入ってくれる方がいればいいのですが、なかなかそのあたりが難しいですね。

それと、高齢者ばかりが帰ってきたわけで、いわば家族崩壊の状態になっているわけです。昔は何世代かが同居していたので、様子が悪いときは誰かが連絡できるような状況が

あったのですが、高齢者だけが帰ってきているので、見守りしてくれる方がいない。老夫婦で二人とも介護を必要とか、認知症が増えて、服薬管理もできないとか……。

行けるところには行ってお薬を飲ませて帰って来るのですが、やはり私一人では足りないので、社協さんをお願いしたり、包括支援の方をお願いしたり、やり繰りしながら行っている状況です。

足が丈夫な方はここまで来てくれますが、必ずしもそうではないですからね。運転免許は返上したりして、足がない。車で行けない、あるいは薬局さんまで行けない。そういう方がほとんどで、運転できている方はひとつかみぐらいしかいないんじゃないでしょうか。

私が一番困っているのは、お薬をここで抱えるわけにいかないので院外処方しているのですが、その院外処方ができる調剤薬局がここにはないことです。それで、いわき地区をお願いしたり、広野薬局さんをお願いしたりして、事前に処方箋を送

り、作って届けていただき、ここからお出しする格好にはしているのですが、いろいろな制約があったりして思うようにはできないわけです。

そういう意味で調剤薬局は必要。もう一つは、訪問薬剤管理指導ができる薬剤師さんが欲しい。1軒1軒回り、服薬管理ができていのかどうかチェックができる薬剤師さん。認知症の方が何人かいらっして、2週間ごとに行くのですが、「薬、どうしたの」と聞くと「飲んでいます」と言う。でも様子が変だなと思って見ると、押し入れに全部蓄えている。そういうことも現にあるからです。

大玉で診ていた方が10人ぐらいいるのですが、かかりつけでないとだめという方がいらして、やむを得ず毎月往診をしてお薬を出しています。

あとは地元の場合は何人か、足がないと思える方にはその都度往診しています。

震災前にいろいろ皆さんにお世話になったから、その恩返しを兼ねて帰ってきた方々を少しでも診られればと思っています。あと何年続けられるかは、わかりません。歳も歳で



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



猪狩 十時子さん (清水)  
[平成28年5月号]

### もう一度故郷で生活 できる日を想いながら

3人の子育てを終え、仕事も引退した私たち夫婦にとって、老後の楽しみの一つは旅行です。平成23年3月は、3泊4日で静岡・山梨方面の旅行に出かけていました。

震災発生当日は、旅行2日目で中伊豆を訪れていました。その日の午後、河津桜の名所近くの川で、大きな鯉が飛び跳ねる珍しい様子が見られました。次いでわさび田を見学していたとき、添乗員が息を切らせ「落ち着いて聞いてください」と大声で話し始めました。その内容は、大地震の発生と大津波の襲来についてでした。バスに戻り、テレビやラジオから伝えられる被害状況は信じられないものでした。後で分かったことですが、鯉が飛び跳ねたのを見た頃が地震発生時刻だったようです。

その後、ホテルに入ったものの不安で夕食も満足に喉を通りませんでした。いわき市に住む長女に電話をかけたがつながらず、千葉県に住む長男や九州に嫁いだ次女を経由して、長女一家の無事を知ることができました。

震災翌日、予定を変更しバスで福島県内を目指しましたが、首都圏以北は高速道路が通行止め。渋滞する一般道を北上し、郡山駅前を経由していわき市へ向かいました。長女一家と合流後、新潟県内を経て長男一家の元に身を寄せました。長男からは千葉での生活を勧められましたが、オートロックのマンションや緑の少ない都会での生活に耐えられず、長女の元を経て、現在生活しているアパートに入居しました。

避難当初、もう富岡には帰れないと思いましたが、避難区域の再編や除染が進み、帰還の可能性が現実的になり、故郷での生活に期待を持てるようになりました。

現在は夫婦でゲートボールを楽しむなど、前向きな生活を送るよう心掛けています。頻繁に一時帰宅を続けていますが、震災で一変した故郷の風景に、若い頃、仕事のため子どもをおぶってバイクを走らせた日々を思い出することがあります。



仮設店舗「えびすこ市・場」開所

すから…。

そんなこんなで、私は、医療、介護、薬局をまとめた一つの施設をつくれば、ドクターが1人いれば兼務できるし看護婦さんだって共有できる、そういう複合施設をつくるようにとずっとお願いしてきました。しかし、縦割り行政の厳しさに実現していません。

帰って来た町民の方々の印象は、自分の家に帰って来て気が休まって、よく寝られた、眠り薬も卒業できたという方もいらっしゃいます。一方には、帰って来てたくて帰って来たはいいけれど、状況が違うのがっかりしたという方もいらっしゃる。これは皆、それぞれの状況で違ってくると思います。一人ひとり皆、条件が違うので、きめ細かな対応といっても非常に難しいことですが、十分な配慮が必要かと思えます。

私としては、帰った方々の健康管理をきちんとしなくてはあげなければいけないということですが、全部が全部うまくいっているかというと、そうはいかない——ということですね。」(2018年11月談)

### 仮設店舗「えびすこ市・場」の5年間

仮設店舗は富岡町内の6業者が合同で立ち上げ、平成24年4月に「えびすこ市・場」として営業を開始。店舗販売のほか、御用聞きや宅配など住民のニーズに合った買い物支援を展開した。

「2011年の暮れ、町の商工会から、

大玉村に富岡の仮設住宅が建っているが、お年寄りが多いなどで買い物難民的なところがあって困っている、そのために商売をやらないかって。で、私自身だけでは不安だから、何人か仲間を募って始まったわけですね(2012年4月26日オープン)」と店長を務めた渡辺吏さん。震災前は駅前で食品店を営んでいた。仲間は、富岡町商工会・富岡町商店街協同組合・町の商店でつくった「富岡さくらの郷」。店名は、毎年11月に開催され富岡町一番の賑わいをももっていた「えびす講市」にちなんだ。

「商売としては成り立つほどではなかったと思いますが、いろいろな補助もありましたから、そういうのを受けながら何とか5年間やりました。いま思うと、少しは役に立ったのかなって思っていますね。」

日曜日を除く毎日、午前8時30分～午後6時30分まで営業。避難された方の交流の場として利用出来るように、テーブルや椅子も用意した。

「試行錯誤で、仮設を一軒一軒まわって“今日は何ありますか？”とご用聞きにまわったり、結構お年寄りにも喜ばれたと思うんですけどね。



町のにぎわいを呼ぶ「さくらモールとみおか」がオープン

それと、大玉村の人とのふれあいの中で“ここは富岡の人しか買いに来られないんですか？”みたいな感じで買いに来る人もいたんです。そういった意味では、富岡の人だけじゃなく地域の人たちにも、少しは喜ばれたかな。

それと、郡山市富田の「おだがいさまセンター」から、水曜日はお年寄りを集めて体操とかあるから弁当みたいなものを作って売ってみたいかと話があり、毎週水曜日はテントを持って行って、野菜を売ったり総菜を売ったり弁当を売ったり、そんなことをしていたんですね。

5年間、使命っていうと大げさなんですけど、果たせたのかなと思いますね。閉める時には、やっぱり皆さんに申し訳ないという思いもありました。仮設住宅から復興住宅へと移った富岡の人たちが、50戸ぐらいあったと思いますが、“やめちゃうんだ…”みたいなこともありましたからね。

でも、私もそうなんですけど、仲間たちそれぞれに、これからの自分たちのことも考えなくちゃいけないっていう思いがありましたからね。」

2017年3月30日、富岡町複合商業施設「さくらモールとみおか」がグランドオープン。隣接する川内村、檜葉町などからの買い物客も訪れ、帰町開始の春を呼び込んだ。

翌日、「さくらモールとみおか」に隣接する北東部に整備が進められていた富岡町災害公営住宅曲田型第一団地、平屋建て40戸・2階建て10戸が完成。竣工式が行われ、入居者代表に鍵が引き渡される。



## 富岡一中・富岡高校から世界へ 富岡町の記憶を胸に戦うふたり



日本人男子初となる世界ランキング1位となった桃田賢斗選手 写真提供：NTT東日本



東京オリンピック出場へ果敢に挑む大堀彩選手 写真提供：トナミ運輸

### プレースタイルを磨いた 富岡一中・富高の6年間

バドミントン日本代表  
桃田 賢斗選手  
(NTT東日本)

富岡時代の思い出は、週に1度、7キロをタイムトライアルで走ったり、縄飛びをしたりしたこと。朝練がとてもしつかったのを今もよく思い出します。あの震災も、周りのみなさんに支えられ何とか乗り越え、感謝の気持ちを戦う力に変えることができました。富岡一中の齋藤先生には、私生活でもいろいろと指導していただきました。富岡高校の大堀先生には、勝負に対する貪欲さを教わりました。試合では、相手の予想を裏切る一瞬のひらめきが勝敗を分ける鍵となります。ネット前の自由な発想など、現在のプレースタイルの源が富岡町の6年間にあります。

昨年、世界選手権1位、世界ランキング1位、全日本総合選手権優勝という成績を残せたのは、富岡一中・富高時代にしっかりと土台を築けたからです。国内外のライバルたちと競う紙一重の勝負では、自分のベストパフォーマンスを出すことが大事になってきます。目の前の試合を一つひとつ丁寧に戦いまず出場権を獲得して、東京オリンピックでみなさんの期待に応えられるよう持てる力を出し切りたいと思っています。

富岡町は、第二の故郷でもありプレーヤーとしての出発点でもあるかけがえのない場所です。今でも熱烈に応援してくださる町民のみなさんを、自分のプレーで勇気づけられるよう日々精進していきます。震災前の暮らしを取り戻すのにはまだ道半ばだと思いますが、早く町が復興することを祈っています。

### 富岡町での日々の積み重ね があるから世界と戦える

バドミントン日本代表  
大堀 彩選手  
(トナミ運輸)

震災が起きてから2か月、チームメイトと再会し猪苗代町でバドミントンの練習を再開できたものの、練習になかなか身が入りませんでした。そんな時、コーチやスタッフ、町民のみなさんの励ましがあったから、震災後の経験をバネに練習に集中することができました。震災後一番印象に残っている出来事は、高校3年のインターハイで史上初となる男女ダブル優勝したこと。富岡高校の名前を背負って戦うのも自分たちの代が最後ということもあったので、町民のみなさんにも喜んでもらえたかなと思います。

2016年、NTT東日本からトナミ運輸に移籍。バドミントンだけに集中して、伸び伸びと練習に取り組んでいます。いまは東京オリンピックに出場することだけしか考えていません。その後のことは選考結果が出た時に考えようと思っています。バドミントン女子シングルスは、日本代表の枠が2つだけで代表入りへのハードルが高いですが、あせっていても今やることをやらなければ結果もついてきません。悔いの残らないようにやり尽くして、オリンピックイヤーを迎えたいと思っています。

東京で合宿や試合となると、富岡時代の友達がいまも会いに来てくれます。富岡町は私にとってずっと心のよりどころです。町民のみなさんの応援が自分の力になっていますし、みなさんのために自分が勝つという気持ちでいます。もっと強くなるよう頑張りますので、みなさんの熱い声援をよろしくお願いします。



## 富岡一中で戦う最後の一年に 成し遂げた全中6冠制覇

富岡一中バドミントン部  
齋藤 亘監督

震災という大変な出来事があった、2か月後に猪苗代町で練習を再開してからも、満足に電気を使えず生徒たちはバドミントンに飢えていました。本当に限られた場所と時間でしたが、その分貪欲に練習に取り組みました。2011年8月の大会では、逆境の中男女の団体と個人3種目で優勝、5冠を達成したことが“ふくしまでバドミントンをやっていける”という旗印になったと思います。バドミントンのエリートと言われ、生徒はどこかに甘えがあったのかもしれませんが。猪苗代町に来て以前と比べて練習時間は7～8割になってしまいましたが、本気でバドミントンに取り組むことがどんなことか分かったと思います。

猪苗代町で部員たちは1年1年たくましく成長してきました。2017年は団体戦で初めて「富岡一中」と「ふたば未来学園（富岡高校）」の男女すべてで優勝して、中高一貫のチームとして名乗りを上げることができました。2018年8月の全中の大会では、男女とも全種目を制覇し6冠を達成しました。バドミントン部の活動が始まって13年目で初の快挙でした。部員たちが口々に言っていたのは、「富岡一中」として戦う最後の1年ということでした。「富岡一中」の名前を歴史に刻みたい思いが成し遂げた結果でした。

私が子どもたちに受け継いで欲しいと思っているのは、連覇やタイトル数ではなく、バドミントンに対する気持ちです。どんな練習をしたかより、その練習にどう取り組んだかが大切だということ。勝負には勝ち負けがついて回りますが、一番大事なのは場所や時間に制約があっても、その中でやれる練習をやったという自信と、あとは全力で挑む覚悟で大会に臨むことだと思っています。



練習に対する姿勢を重んじ選手を育てる



何度も繰り返される基本練習

## 先輩たちの魂を受け継ぎ達成した インターハイ史上初 男女アベック優勝

元富岡高校バドミントン部監督  
大堀 均さん  
(トナミ運輸バドミントンチーム コーチ)

震災を機に、バドミントンをできることが当たり前でないこと、プレーできる本当の喜びを感じることができました。選手たちも指導者も、競技に対する姿勢が大きく変わりました。応援してくれる人、練習環境を整えてくれる人、生活拠点でお世話してくれる人たちのおかげで、コートに立てることを実感して、それを戦う力に変えられたと思います。

震災後一番印象に残っているのは、2011年のインターハイです。震災の影響で男子2名、女子7名が抜けてしまいました。残った男子9名、女子6名で5月に活動を始めましたが、主力になるはずだった選手たちが郷里に戻ってしまい戦力も大幅にダウン、インターハイに出られるか微妙な状況でした。それに関わらず、男女ともに3位入賞という記録を残しました。震災前は控えの選手たちが、全試合に出場し持てる力を振り絞りプレーしました。この時の選手たちの頑張りが後輩たちにしっかりと受け継がれ、翌年の女子団体初優勝、翌々年の男子団体初優勝、3年後の男女アベック優勝の礎となったのだと思います。

2017年に、富岡高校の休校と同時に教諭を辞めて、以前選手として所属していた実業団トナミ運輸のコーチとなりました。きっかけは、大きな夢に向かってひたむきに頑張る富高の部員たちの姿でした。富岡でたくさんの生徒たちと出会いエネルギーをもらいました。指導者としての一番の目標は、何と言っても東京オリンピックに選手を出してあげること。選手だけでなく、私たち指導者も成長させてくれた町とのつながりに、終わりはありません。富岡町の代表というつもりでバドミントン道を極め、みなさんにいい報告ができるよう、さらに上を目指していきたくと思っています。



選手と二人三脚で東京五輪出場を目指す



彩選手とハイタッチする大堀コーチ



齒嚙み7年の避難から  
心の札を切り直し  
わたしたちはかえりはじめる  
子どもたちへの約束を果たすため



# 4 帰町開始 —— “心”の復興に向けた年中行事の復活

平成29年度 2017.4.1-2018.3.31

## 目に見える復興を着実に、目に見えぬ“心”の復興を丁寧に

4月1日午前0時、帰還困難区域を除く町内の避難指示が解除となった。解除に先立ち、3月6日から役場本庁舎での業務が再開され、富岡町の復興・再生はようやくその本拠に立ち、スタートを切る。町民の帰町開始のために必須となる生活インフラのほか、健康・福祉等のサービスの再開、さらなる充実への取り組みが加速される。

春から始まるふるさとの季節が、ふたたび巡り始める。そのスタートを祝う催しに和みがふくらみ、移りゆく四季に集う顔からは笑顔がこぼれる。しかし、やっとこれからののだとの厳しい現実、気を引き締め、持ち場と思い定めた仕事場に向かう。

そして、町民のふるさとへの思いをつむいで描かれた「離れていても“ふるさと富岡”」を実現し、なくてはならぬ子どもたちの声が弾む本当の春を取り戻すため、町が動き出す――

4月8日、復旧工事が終わったばかりの富岡町文化交流センター学びの森で「富岡町帰町開始記念式典」が行われ、富岡町町民歌「富岡わがまち」の歌声が響いた。式辞の中で宮本町長は「避難することとなったあの時以降、すべての町民は、4月になるとふるさとの桜を想い、懐かしんでまいりました。避難指示の解除を経て、ようやく今年、我々富岡町民の心の拠り所である桜の下で、再会を喜び合うことができます。残念ながら、帰還困難区域を有するわが町としては、本当の春を迎えるまでしばらく時間を必要といたしますが、富岡町民としての誇りを胸に、引き続き、町内生活環境の更なる改善

や、帰還困難区域の再生を始めとする“ふるさと富岡”の復興、更には心の復興の実現に全力で取り組んでまいります」と、ようやく本当のスタートラインに立ったことを踏まえながら、参会した町民や関係者に引き続きの支援と協力を願った。

時を合わせて富岡第二中学校周辺を会場に「富岡町復興の集い 2017」が催された。前年まで広野町で行われていた“桜イベント”の、7年ぶり震災後初めての町内開催で、盛りだくさんのステージイベントとまだ咲きそろわぬ桜並木の散策を楽しんだ。帰還困難区域に隣接する複雑な思いも嘯みしめながら…。



JR富岡駅バスの運行

### 2017(平成29)年度

- 4月 1日 ・午前0時 帰還困難区域を除き避難指示を解除  
・総合福祉センター再開



- ・路線バス、デマンドバスが運行開始

- 5日 ・富岡郵便局の開局セレモニー(6年ぶりの再開)



- ・地域活性化及び住民サービスの向上を目的に包括連携協定を東邦銀行と締結

- 8日 富岡町帰町開始記念式典及び富岡町復興の集い2017開催



- 16日 震災後初の町内で富岡町消防団春季検閲式

- 21日 館山荘デイサービスセンターもともちが再開



- 23日 JAEA廃炉国際共同研究センターが開所

- 5月 12～ ふるさと生産組合は、4年目の実証栽培となる田植え

- 17日 県産新酒22銘柄が金賞受賞、金賞獲得数5年連続日本一

- 22日 双葉地方広域市町村圏組合は、富岡消防署新庁舎の建設に着手し、移転先となる富岡合同庁舎西側の現地で安全祈願祭と起工式を実施



富岡町帰町開始式典及び富岡町復興の集い



挨拶する宮本町長



万感の思いを胸に「富岡わがまち」を歌う町民

総合福祉センターや富岡郵便局の再開と町の機能が動き始め、いわき富岡間路線バス、復興拠点循環バス・デマンドタクシーなどの運行も始まり、高齢者が多い帰還町民の“足”も確保される。新常磐交通(株)による路線バス「急行いわき—富岡線」(祝日を除く月～土曜日の週6日、1日3往復運行)と町内循環バス(祝日を除く月～土曜日運行、午前・午後3便ずつの1日計6便、運賃は170円均一)、檜葉タクシーによる「デマンドバス」(月・水・金・土曜日の週4日運行、町民無料)で、生活交通の充実と町民の往還の活発化が期待された。

4月16日、富岡町消防団春季検閲式が震災後初めて町内で開催された(町総合スポーツセンター多目的広場)。町民の帰還により心配される火災の予防など、参加した団員らは、取り戻した現場の感覚を確かめながら本格化する町内での活動への決意を新たにする。

全町避難後は、大玉村の応急仮設高齢者等サポートセンター内の仮設介護施設で業務を継続していた社会福祉法人伸生双葉会「館山荘デイサービスセンターもとまち」が、建物・設備を修復・リニューアルして、4月21日に再開。高齢者に不可欠な施設の一つとして、健康・安心のサ

ポートとともに、町民のコミュニティ作りの拠点となることが期待された。

- ・サービス内容  
送迎、介護予防及び日常生活支援、入浴、趣味活動やレクリエーション、介護相談等
- ・営業日：毎週火曜日・金曜日  
午前8時～午後5時(サービス提供時間：午前9時30分～午後3時)

### 原発廃炉に向けた研究拠点 ——産業・雇用の創出

町民の帰町の大きな要件の一つは働く場所の確保。そのためのシンボルともするべく誘致され、役場本庁舎向かいに建設されていた日本原子

力研究開発機構(JAEA)の廃炉国際共同研究センター国際共同研究棟が竣工し、開所式が行われた(4月23日)。この施設は、国主体で行う福島・国際研究産業都市(イノベーション・コースト)構想の重要拠点となるもので、国内外の研究者を招き、放射性廃棄物の処分に向けた研究や燃料デブリ(熔融燃料)の分析、遠隔操作技術の開発などに取り組む。福島第一原発の廃炉のための中核拠点として、国内外からの技術者などが集うことから富岡町の新たな産業集積を促し雇用創出につなげると同時に、魅力ある町づくりの新たな交流拠点となることも期待する。

7月31日、任期満了に伴い行われた富岡町長選挙で現職の宮本皓一町



JAEA廃炉国際共同研究センター



長が二期目の当選を果たし、8月7日の就任式で「町民に戻りたいと思ってもらえる富岡を作っていく」と職員を前に決意を新たにしました。

夏から秋にかけて、富岡夏まつり(8月11日・富岡一小)、富岡町敬老会(9月15日・富岡町総合体育館)、ふたばワールド2017 in とみおか(9月30日・富岡一小、一中)、とみおか復興ロードレース大会(10月1日)など、恒例の行事が次々に復活開催され、訪れる町民との再開のにぎわいがかさねられる。

帰町開始の判断に際して、町は帰町検討委員会を設けて検証を行ってもらい、その提言を判断の材料とした。この委員会の後継組織として10月12日、「くらし向上委員会」が新たに設置された。これは「富岡町災害復興計画(第二次)及び富岡町帰町計画(まち・ひと・しごと創生総合戦略)に基づいた復興施策の進捗状況や町の現状を専門的見地から客観的に評価し、これらの結果を踏まえ、更なる生活環境の向上を図るための取組等」を町に提言してもらうための組織で、関係機関や産業界等から15人が委員に委嘱された。評価事項は、

- (1)復興施策の進捗及び町の現況等の客観的な評価に関すること
- (2)更なる生活環境の充実政策に関



- すること
- (3)その他、必要な事項に関すること

とされ、町長指名の委員長には災害復興計画(第二次)の検討委員長を務めた渡辺和則さんが選出された。

引き続き行われた委員会の中で渡辺委員長は「富岡町に足を運ぶたびに、土地の復興が加速し、目まぐるしく変化している状況が見受けられる。災害復興計画(第二次)では、復興はもちろん、それに伴い、人の心の復興も両輪として進めていくことを大きな理念とした。帰還が難しいという声はまだ多いと思うが、障害をどのように取り除くか、どのように復興を加速させていけるか、皆さんと検討していきたい。帰町している町民の悩みについて検討することはもちろん、帰還を考えている人や帰還できない人の不安や障害も取り除くために、色々な方策を検討したい」と、第二次計画の理念に照らしての評価と更なる生活環境向上への取り組みを期してあいさつし、委員らの協力を求めた。

### 町民有志の運営による「富岡ホテル」開業

震災被災で不通となっていたJR常磐線竜田-富岡間が、10月21日、6年7か月ぶりに再開、午前6時12

## 富岡町 復興・再生のあゆみ

### 2017(平成29)年度

6月	7日	県立ふたば医療センター(仮称)の安全祈願祭と起工式を実施
	15日	「共謀罪」法採決強行、可決成立
	23日	富岡川漁業協同組合による鮎の放流
7月	30日	富岡町長選挙・富岡町議会議員補欠選挙
	31日	富岡町長選挙 宮本皓一氏が再選
8月	第47回全国中学校バドミントン大会で、富岡一中バドミントン部が、男女団体アベック優勝	
	9日	富岡町災害公営住宅(曲田第2団地)完成



11日 7年ぶりに富岡夏祭り復活



9月 15日 富岡町敬老会を町内で開催  
30日 ふたばワールド2017 in とみおか開催



10月 1日 とみおか復興ロードレース大会



5日 カズオ・イシグロ氏にノーベル文学賞  
12日 くらし向上委員会を設置  
17日 町民有志が運営する富岡ホテルが営業開始



富岡ホテル開業セレモニー

分、かつてあった場所から約100m北に再建された真新しい富岡駅の3番線ホームに一番列車が到着した。以北の富岡一浪江間はなお不通だが、基幹交通の復旧は復興への格別の後押しになるものと期待された。

その富岡駅前から100mばかりの所に、4日前にオープンしたばかりの「富岡ホテル」が建っていた。大玉村で仮設店舗「えびすこ市・場」を開

いていた渡辺吏さんら町民有志8人が運営会社を設立して開業したホテルだ。4階建て、シングル66室とバリアフリー対応のツイン3室の計69室。レストランやバーラウンジ、小会議室なども備えた。用地を提供した渡辺吏さんが社長に就いた。

「大玉の“えびすこ市・場”を開いて2年ぐらゐ過ぎたころから、一緒

に携わっていた仲間ともども、先のことを考えました。自分らの年齢ならあと10年は、何かできるよなって。そして、やるんだったら富岡で、この仲間と一緒に…と思い始めました。

それで、単純なんですけど当時浜通り地区に泊まるところがないといわれていたので、そういうものはどうなのかな…富岡でもやっていけるのでは、思ったんですね。しかし利用できそうだと目をつけた補助制度は、もともと宿泊業をやっていたのでないと使えないことがわかった。それならほかの制度はないかと、商工会の人や役場にも、随分お世話になりました。こういったものをやりたいと言ったら、じゃあこういう場所、ここだったらいいんじゃないか——という感じになり、そこからここに至るまで、実現させるまでの国、県との交渉とかね。

みんな、われわれの熱意はわかる、国、県、当然町の役場も、いいことだから叶えてやりたい、でも法制度が追い付いてない、と随分(笑)。途中からある程度法制度を変えてくれたわけですが、その交渉に2年間ぐ



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



木下 博之さん (夜の森駅前北)  
[平成29年1月号]

### 新天地いわきで 「あけぼの」の看板を 再び

東京で理容室を創業した両親が昭和46年に故郷の富岡町に戻り、移転開業しました。私が修行から戻りしばらくの間は両親と3人で店に立っていましたが、父が体調を崩してからは、美容師の妻が加わり、理・美容室として営業していました。

移転開業以来、家族ぐるみで来店くださる方々も数多くおりました。大地震に襲われた時は常連のお客様が1人いましたが、停電や断水で施術の中断を余儀なくされお帰りいただきました。避難後、その方から「料金の支払いを忘れた」とご連絡を頂きましたが、もちろん料金は受け取れないと申し上げ、不可抗力とはいえ、こちらの方が申し訳ないとお詫びしたこともありました。このよ

うな義理堅い方もいらっしゃるなど、開店以来の約40年間、お客様に恵まれた日々を送らせていただきました。

避難から数か月間、私たち夫婦と母は町内の同業者と共に避難所等をまわり、散髪ボランティアとして活動した時期もありました。その後、仮設住宅の連絡員や町内パトロールに従事しました。

町を離れてから、郡山市やいわき市などで生活拠点となる場所を探しましたが、どこに行っても理美容業は多数あり、また、カットのみなど部分施術で安さを売りにする新業態も見られるなど、避難先での開業で商売が成り立つのかと悩んだ時期もありました。しかし、新しい土地でも誠心誠意お客様に接すれば、必ずご愛顧いただけるはずと夫婦で気持ちを据え、いわき市内に物件を探し、昨年9月に開店を迎えることができました。

突然の避難で、長年ご愛顧いただいたお客様に十分なおあいさつもできないまま事業再開となり、恐縮ではありますが、両親が故郷に移転開業し私たち夫婦が加わって歩んできた生業の大切な証である「あけぼの」という看板を掲げ、家業を再びスタートいたしました。お近くにお越しの際は、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

らいかかりました。

しかし、国、県、町の人たちに真剣に言い続けたことが最終的に聞き入れてもらえたことで、役所への見方も変わりましたね。真剣に言っていけば、向いてくれる人がいるんだと。いま思うと、これが実現できたことに自分たち自身が驚いているわけですから。“ああできたんだなあ！”って。

こうした流れの中ですら皆さん、このホテルについても、富岡の復興のためという取り上げ方をされますけど、結果的にはそこにつながるとは思いますが、私たちにとっては違うんです。私たちはあくまで、今後何年生きて、何をしていくかということをも真剣に考えて、これを作った。何かまだ、できるよなという思い。要するに、前に進むことしか考えていませんでした。駄目になったらどうしようとかは、考えなかったですね。

でも、これ全部が補助でできたわけではなく、大きな借金をしてやっているわけですから、とりあえず借金だけは返していかなくちゃならないと思っていますところ。個人でやるのではない、一人でやるのではない経営の難しさも分かってきたところです。

ちょうど1年たったところですが、



万象ホールディングス富岡工場竣工

地域の人の利用というのは避難先から帰って来た時とか、富岡に用事がある顔見知りの方がやっているから泊まりに来たとか。そうやって来てくれる人たちに会うと、ホッとします。私らホテル経営の専門ではありませんでしたけれど、それぞれ商売としてはやっていた人間ですから、その個人商店で培ったものを生かしながら、アットホームな“富岡ホテルらしさ”を育てていければいいなと思っています。

レストランは、朝夕はバイキング形式ですが、夜だけは、ちょっとご飯食べたいなという宿泊外の人にも、利用してもらえるようにしています。」(2018.10.23談)

### 「ロックウール」を富岡から世界中に——「万象ホールディングス富岡工場」稼働

赤木地区の富岡工業団地第2区画に建設されていた震災後初の誘致企業「万象ホールディングス富岡工場」が、2017年11月15日に竣工、翌12月からロックウール製品の製造を開始した。

2015年8月に富岡町と工場新設の企業立地等に関する基本協定に調印していた同社は、2017年6月、本社

## 富岡町 復興・再生のあゆみ

### 2017(平成29)年度

- 10月 19日 都市計画審議会委員に委託状を交付
- 21日 JR常磐線竜田一富岡間再開通



- 22日 富岡町消防団秋季検閲式  
衆院選で自民圧勝、立憲躍進

- 11月 4日 東北中央自動車道 福島大生一米沢北間が開通
- 4～5日 震災後初となる富岡町ふれあい町民号を開催



- 11～12日 震災後初となる第89回富岡えびす講市を開催



- 11月 15日 震災後初の誘致企業「万象ホールディングス富岡工場」が竣工
- 23日 平成29年度町政懇談会(東京都品川区)
- 26日 平成29年度町政懇談会(郡山市)

- 12月 1日 富岡復興メガソーラー・SAKURA完成



- 3日 平成29年度町政懇談会(いわき市)
- 7日 富岡町農業アクションプラン事業化検討委員会の第一回会議を行った
- 21日 富岡町桜まつり2018の実行委員会を設置し、第一回目の会議

- 1月 7日 富岡町成人式を震災後初めて町内で開催

を東京都台東区から富岡町へ移転、建築資材の耐火被覆材「ロックウール」(建物を支える鉄骨を火災による崩壊から守る耐火性能を持つ)生産拠点としての新工場などの建設を進めていた。

2005年の株式会社まく象設立に始まる同社グループは、ロックウールの販売から始まり、施工・製造へと業容を拡大してきた。「生産から販売までの一貫体制を作りたいというのは長年の夢でした」と語る代表取締役の吉川孝則さんは、母親が福島県棚倉町出身で、子どもの頃この辺りによく遊びに来ていたという。土地勘もあり地域の風土も理解していた。そして震災を機に、復興に貢献したいという思いを募らせたことが、富岡町進出の大きなきっかけとなっ

た。ここに地元で働ける雇用を生み出せば、住民の帰還に貢献できるとの思いを抱いたのだ。

ロックウールは、人体への健康被害で知られたアスベストの代替材として広く使われ、安全性が確認されている建築資材だ。その素晴らしさを誰よりも知る吉川さんは、この素材を富岡から全国へ、そして世界へと届けていきたい、と夢みている。さらにロックウールはリサイクルも可能なほか、水耕栽培の培地としても有望だ。その培地としての利用をまず富岡からテストし、全国へ広めていければ、とも吉川さんは夢みる。

吉川さんの富岡復興への思いは強く、自身も富岡町内に転居している。そして「ここに根差しているからこ

そ見えてくる問題点はあります。たとえば、物流や買い物が便利になって、もっと暮らしやすくなってほしい」と語る。同社はすでに社宅も完成(2018.9現在)、50世帯を越える社員が富岡町に居住できる準備が整った。それだけに、子どもから大人まで安心して学べて、働ける環境が整ってほしいと。そうすれば、ここで普通に暮らして、働いているよということをもっと発信していける。そんな、民間会社だからこそできることがあるとの思いから、吉川さんは「町内ソフトボール大会」を企画、大きなトロフィーを準備してその開催に尽力した。大会には4チームが参加し、和気あいあいと勝利を競い合った。「こんな日常が営まれていることを、もっと知ってもらいたい、

## 富岡町の皆さんと共に

MESSAGE



米山 知宏さん

杉戸町役場  
住民協働課 主幹

2016年4月1日から2018年3月31日までの2年間、富岡町友好都市の埼玉県杉戸町からの派遣職員として富岡町役場に勤務。

1年目の2016年は郡山事務所で、帰町した2年目は私も富岡町役場の本庁舎で仕事をしました。この大きな節目に立ち会うことで、避難指示解除で帰還した皆さんが感じるであろう思いというか、単純ではない気持ちを、少なからず共有できたのではないかなと感じています。

避難指示解除前の2016年の業務でも、前年に町内に設けた富岡町交流サロンや町内への一時立入りの担当だったことで、町に立ち入る機会が多くあり、1年目から町の現状を知ることが出来ました。

避難指示解除により、勤務先が本庁となった際に、町職員と苦労を共有したくて転居をせずに、郡山市から通勤することを選択しました。郡山市のアパートから富岡町役場まで車で、毎日5時50分に家を出て8時前くらいに着く、1時間半の通勤。走り慣れない山道を毎日走って、冬場などは凍結するところもあり、何度ヒヤッとしたことかありません。

特に印象に残っている業務は、県外に避難している町民の方たちに富岡の現在の状況を伝えることでした。その場面で避難生活をしている方たちと話す機会がたくさんあり、いろいろな方からいろいろな話を聞くことができました。そして痛感させられたのが、避難先でのコミュニティ形成の難しさということでした。富岡町に派遣されてまず感じたのは、都心部などと比べたらとても濃い、隣近所とのお付き合い。それこそ昔でいう、雨が降って来たら隣の家の洗濯物を取り込むような関係性が、震災前まで持たれていたのだろうなということです。それが避難によって断たれ、孤立してしまい、活

発だった方が引きこもりになってしまうというケースも直接に目の当たりにしました。富岡にいれば少なくともよかったはずのそうした苦労をしておられること、非常に痛ましく感じることも少なくありませんでした。

富岡町の役場帰町のとき、私は、避難指示解除イコール復興ではない、と考えていました。町に戻ってからが復興の始まり、ここまでは復旧、それからが大切、そう思っていました。そして、ゴールが見えないのがこの震災からの復興というものかもしれないとも思っていました。そもそも、自治体運営というものにゴールなどはないのかもしれませんが。その都度その都度、直面する問題に立ち向かう、町が抱える問題を解決していく、その連続のはずだからです。

いま富岡町は、第二次復興計画に基づく取り組みを一途に進めているところです。まだまだいくつもの大きな問題を抱え、それを解決するにはどの道が正しいのかという選択を迫られているところでもあるでしょう。その大きな決断をしなければいけないことは、職員にとっても町民にとっても、苦労の連続のはずです。

でも、ここまで来ました。引き続き頑張ってください！——と願っています。杉戸町長が言っているとおり、杉戸町と富岡町とは兄弟ですから、私も引き続き支援を継続させていただきたいと思っています。いま私がいる部署は富岡町との交流窓口もやっていますので、月に1度ぐらいは富岡町に足を運ぶ機会があります。これからも引き続き、富岡町の変わりゆくさまを身近に感じながら、バックアップさせていただければと思っています。

そして新しいふるさととなった富岡町の復興を、支援してくれた日本全国、世界中の人々に、感謝と共に伝えたい」と。



原発事故による放射能汚染という事実は、富岡町民のみならず、浜通りそして福島県民全体を傷つけている。今この富岡の地から、環境にも人体にも害を及ぼさないロックウールの用途を日本全国に、そして世界へと広げていく——。吉川さんのこの夢は、同社のみならず、地元の人々が共に見ることができると大きな夢となる。同社がこの地で生産と業績を伸ばしていくこと、それはそのまま富岡町の新しいまちづくりへと広がり、さらに浜通りの未来へとつながっていく——。

## 富岡えびす講市、7年ぶりに開催——晩秋の風物詩復活に約8000人が集う

避難後4年間を町外で過ごしていた小・中学生に富岡町の思い出を聞くと、誰もが一番に「えびす講市！」と応えた。それからさらに3年が過ぎた11月11日～12日、第88回で止まっていた「えびす講市」が復活した。「第89回富岡(新)えびす講市」と銘打たれたが、避難がなければ95回となっていたはずの、95年の歴史を有する町一番のにぎわいの祭りだ。

震災前は毎年、富岡中央商店街通りで開催され、2日間で約3万人の人で賑わったこの祭りは、商売繁盛を願う事代主(恵比寿)神社の例大祭に合わせた秋市で、期間中は160余の露店が立ち並んだ。またえびす餅の振る舞いなどと共に特設ステージで練り上げられる芸能文化パフォーマンスを楽しんだ。

そのメインステージが設けられる買い物駐車場の隣で薬局などを営んでいた菊地成一さんが(新)えびす講市の運営委員長を務めたが、会場は本来の通りではなく、復興拠点である曲田地区の通りでの開催となった。約8000人が来場し、40余の露店、ステージイベントを楽しみ、懐かしい賑わいの中で旧交を温め合った。



晩秋の青空に祝福されえびす講市が復活

## 富岡町 復興・再生のあゆみ

### 2017(平成29)年度



- 1月 9日 町の歴史と震災の記録を後世に伝える、アーカイブ施設整備認識者検討部会を設置
- 11日 富岡町災害公営住宅(栄町団地)完成
- 14日 震災後初となる富岡町消防団出初式を開催



- 15日 復興に向け必要と考えられる取り組みを町に提言する「富岡町くらし向上委員会」の委員長と副委員長が町長に意見書を手渡す
- 19日 平成30年富岡町表彰式・新年賀詞交歓会を開催
- 21日 帰還困難区域再生に向けた住民説明会を開催

- 2月 17日 平昌冬季五輪(韓国)男子フィギュアスケートで、羽生選手2大会連続金メダル
- 19日
  - ・帰還困難区域の再生に向けた「特定復興再生拠点区域復興再生計画」を国に認定申請
  - ・町立中学校三春校の生徒は、役場本庁舎を訪れ町長ら町職員に町のさらなる復興に向けた提言を行った



- 26日
  - ・杉内地区の麓山神社で社務所の上連式が行われた
  - ・JR富岡駅周辺のにぎわいづくりに向けて設置した、富岡駅前になぎわいづくり検討委員会の委託状交付式を行った

- 3月 9日 帰還困難区域の再生に向けた「特定復興再生拠点区域復興再生計画」が国より認定
- 11日 町内で初 平成30年富岡町東日本大震災慰霊祭



多くの人々が待ち望んだ「秋の風物詩」

「復活、と言えるのかどうか、(新)えびす講市は、もともとそこに住んでやっていた人たちが“やらなきゃ駄目だ”ということで再開したわけではなくて、祭りを取り戻そうという行政イベントの一つです。

それはそれできっかけとしてはいいんですが、根本的に違うのが地域住民が汗水垂らして、予算も労働力も自分たちで出し合ってやってきたものが、お金もマンパワーも用意してもらって、段取りがあった上での祭りだということ。そのあたりで、前の感覚とちょっと違うんです。だから魂はちょっと違う、新しい、ニューえびす講市。再開のシンボル

としてのえびす講市なのかなと。元の商店街の人たちが、もう集まってこないですよ。

ただ、去年の“えびす講市”に来た人が話してくれた言葉が、すごく心に残っています。“みんな、自宅を解体してしまったり避難先で家をつくってしまったりで、富岡に来たくても、家もない用事もない。そんな中でこのお祭りをやってもらったので来ました。富岡に戻ってくる用事ができました！”と。

ああ、そうか！と思いましたね。単なる町の行政プログラムの中での祭りということではなく、純粹に“えびす講市”を待っていてくれる人、

そういう町民の皆さんがいるんだと。そういう人がいるなら、とにもかくにもやるということに意味があるのかなと思いました。

この祭りに関わった商工会の人たちはすごく一生懸命やっていて、富岡に強い愛着を持っていると思うんですが、これから先、商工会の会員もどんどん変わっていくことも考えられます。いま地域を考える原動力になっている人たちの熱意がだんだん薄れていくかもしれない。そんな心配もありますね。現在富岡で活動しているという人たちは、いわば富岡を仕事にしている人たちが中心です。そういう人がいないと今は成り



## 広報とみおか 桜通信 [抄]



佐藤 光清さん (小良ヶ浜)  
[平成29年11月号]

### 故郷の将来をみんな ともっと話し合いたい

長年自宅近くにあった畜産会社や町内の建設会社に勤務するかたわら、農業を営んできました。会社勤めと農業の日々はかけがえのないもので、まさに「故郷」によって支えられていた生活でした。自宅がある小良ヶ浜地区は水はけが良い台地が多く、また、震災の数年前から通称「浜街道」の改良工事が本格化するなど生活環境の整備も進んでいました。

震災翌日、母と共に町を離れ、福島県内を転々とした後、茨城県阿見町の姉一家の元に身を寄せましたが、町の情報が入手できないため単身で県内へ。ビッグパレットふくしまでは、避難所の様子や町職員の多くがマイクロバス内で寝泊まりしている様子に涙が出る思いでした。

当初は私も車中泊をしながら避難所間を移動する町民の輸送を手伝いましたが、知人から原発事故の収束作業に加わってほしいとの連絡を受け、危険を承知で駆けつけました。

小良ヶ浜地区は帰還困難区域のため、長期間自宅での生活や農業の再開は望めません。せめて家族そろって暮らしたいという思いで、3年前にいわき市内に家を建てました。現在私たち夫婦は、長男一家と2世帯住宅で生活しています。一方、母は避難前まで元気でしたが故郷を離れて以降老いが進み、いわき市内の施設に入所しました。

私は今年度から行政区長を務め、共有財産や地区内にある神社の補償賠償手続きを進めています。総会など行政区の集まりは参加者が減少し、高齢化も進んでいます。若い世代には「高齢者の親睦」のように見えるかもしれませんが、今だからこそ故郷の将来について話し合う場が必要ではないでしょうか。

復興には長い時間がかかりますし、避難先に定着して故郷の自宅を解体しても土地は残ります。それゆえ、行政任せではなく、住民自らが復興に向けた長期的ビジョンを持つべきだと考えます。ぜひ将来を担う若い世代の皆さんに参加していただきたいと思います。

立ちませんのでそれも大事なのですが、その仕事と同じような感覚で町民をひと括りにして考えられては困ると思うんですよね。見た目は何かできたようだけど、魂がそこに入っていないみたいな怖さを感じるというか…。

その、見た目がどんどん整っていくのを見るのも、実は怖いんです。それを見ると、ああ、俺だけ遅れているなみたいな、そういう感覚にも襲われてしまいますから。やりたくても動けない、成り立たないという業種とか、いわゆる復興の流れから外れたところにいる町民たちはね。

もうすぐ8年です。多くの町民は、今が一番辛いんじゃないでしょうか。富岡と辛うじてつながってきたけど、10年という暗黙の節目を前に、どうしたらいいかと迷っている人、悩んでいる人が、まだほとんどじゃないでしょうか。

世間の見方も、ほかの地域でもいろいろ災害が起きたりしているものだからそれと同じ目で見てしまうでしょう。そうすると、例えば私の状況をよく知っている人でさえも、私の前で「もうそろそろ」みたいな話をされることがある。やはり、当事者じゃない人の想像力が及ばない状況の中に置かれているんだなと感じてしまう……。

でも一方では、私ら自身も、自分たちが原因ではないにもかかわらず、自立というか、そろそろ決断をするしかないかなと自分を責めるというか、そういうところまで来てしまっている。原発事故というものが足かせになったまま、一生こんな気持ちで生きていくのは絶対駄目だと思いますからね。

辛いですよ。富岡を捨てたわけじゃないですから、難しいところをみんな抱えています。だから、富岡に戻ってどんな町になったらいいのかなと考えると、やっぱり隣近所が顔見知りで、困ったときには助け合えるとか、そういう単純なところが出来てくればいいなと思うんで

す。工場はいっぱいできたとか立派な建物ができたとかではなくて、もう一回住んでいる人同士がつながって“いいよな、温かい町だよな！”っていうところ。いま一番、私たちににとって必要なところですよ。」

(2018.12談)

## 小中学校来春再開へ—— 富岡町総合教育会議で表明

帰町開始元年第1回富岡町総合教育会議が11月1日に開かれ、「学校再開に向けて」の検討委員会の報告書を受けた後、宮本町長は2018年4月に町内で小中学校を再開する方針を表明した。改修を進めている富岡第一中学校の校舎を活用し、小学生と中学生が同じ校舎で学ぶほか、「コミュニティの拠点になる学校」に向け子どもたちと地域住民が集える交流スペースを設けるなど、従来の義務教育学校の殻を破る多世代が集い学び合う、ある意味では先駆けとなる学校づくりが掲げられた。

これを受けて12月16日～17日、校舎(一部教室)の見学会が実施された。

年が明けて迎えた帰町開始後初めてのお正月、「学びの森」での成人式(1月7日)に98人が集う。7年ぶりの消防団出初式がさくらモールとみおか駐車場を中心に行われ、富岡川河川敷に消防車5台一斉放水訓練の虹が架けられる。避難先とは異なる初春の浜風が奏でる、昔と変わらぬ新年のよろこびに浸るひととき。しかしすぐに、それは小さく切り取られた部分を見る限りの東の間の印象にとどまり、全体を見、俯瞰すれば緒に着いたばかりの復興の取り組みやそれさえ未着手となっている区域など、むき出しの課題の連なりがちまち目に入る。町民の帰町もまだごく一部にとどまる——。

1月15日、10月に設けられ復興施策の進捗状況や現状を確認しながら、「くらしやすく居心地の良い富岡町

づくりを町に提言をするべく考えを交わし合っていた「富岡町くらし向上委員会」からの意見書が提出された。「震災前からの町民と新しい住民、町内に住民票がない方にも町に関心を持ってもらう事が必要。ふるさとへの関わり方や交流機会の創出に取り組んでいただきたい」との意見とともに、震災前からの町民と新たに移り住んだ町民、行政、見守り活動にあたる団体が連携を強化するための「総合的なネットワークの構築」や、イノシシなど有害鳥獣の被害防止に向けた継続的な取り組みなどが提言された。計画の着実・丁寧な推進を徹底するとともに、時間の推移、現状の変化とともに、災害復興計画(第二次)策定時にはまだそれほど意識していなかったような問題への新たな対応の必要などをまとめたものだった。

帰還困難区域再生への本格的取り組みも急がれた。町は当初、その全域を対象として特定復興再生拠点区域復興再生計画を立てようとしていた。しかし、国の法制度上困難との復興方針に阻まれ、特定復興再生拠点区域を帰還困難区域の一部として先ず着手する、段階的な取り組みとすることへの方向転換を受け入れた。

早期再生への本格着手が最優先と判断したこの方針の下、住民説明会での意見や要望も加味しながら2017年12月に「富岡町帰還困難区域再生構想」を策定。さらに、この構想と第二次復興計画とを踏まえて「特定復興再生拠点区域復興再生計画」をまとめて、2018年2月19日に国に申請し3月9日付で認定を得る。

国道6号西側の夜の森・新夜ノ森地区を中心に“特定復興再生拠点区域”を設けたこの計画により、JR常磐線夜ノ森駅周辺は2020年春、2023年春には特定復興再生拠点区域全域の避難指示解除に向けて、あきらめない帰還困難区域全域の再生への取り組みも本格化していく。

# どんなときにも、どんなところでも！

## 富岡町消防団



2017（平成29）年4月1日、帰還困難区域を除き避難指示が解除される。その2週間後の4月16日、富岡町消防団は震災後初めて町内で春季検閲式を開催する（町総合スポーツセンター多目的広場）。

### 震災後初めてふるさとで「春季検閲式」を行う

猪狩 富行さん

（富岡町消防団長／震災当時副団長）



私たち自身も震災後避難しましたが、実は避難先での消防団としての活動はすぐに始まりました。それは「町民がどの避難先にいるか」を探す作業でした。消防団は地域密着なので、地元の人々の顔を知っていますから。まずは消防団員がどこに何人いるかを把握し、それからバラバラになった町民を各地で探しました。また、震災の翌日からパンやおむすびの支給が始まったので、それを団員が役場職員と一緒に各避難所に配る作業もしました。その後は、当時の安藤団長が「とみおか守り隊」という組織を作り特別に許可をもらって消防車で町内のパトロールを行い、町の安全安心につながる活動を現在も行っています。

2017（平成29）年4月16日、震災後初めて町内での春



春季検閲（2017年4月16日）

季検閲を行いました。それまでは広野町などでお借りしてやっていたが、やはり消防団は地元密着の存在、非常に

肩身の狭い思いでした。だからこそ、地元でできた時は、団員全員がその喜びを共有できたと思います。

さらに翌年1月17日の出初め式（さくらモールとみおか駐車場）も、震災後初めての地元開催となりました。4年に一度の双葉郡連合検閲も富岡町で行いました。もともと連合検閲は、地理的な条件もあってほぼ毎年、町内の夜の森地区で実施するのが恒例でした。

震災から少しずつ前に進んで、ここまで自分たちで出来るようになったことは、非常に感慨深いものがあります。団員は300名余でしたが、震災後は団員の住まいがバラバラになってしまい、やむなく100名近くが脱退しました。現在は何とか150～160名ぐらいが協力できる状況ですが、検閲などに来れるのはそのうちの半数ぐらいです。

団員にはいろいろ協力してもらって団の活動が成り立っていますので、本当に感謝しています。県のポンプ操法大会への出場なども、「やりたい、出場したい」という意気込みは本当にありがたかったです。さらに麓山の火祭りをはじめとする伝統行事への団員の参加や、警備も実施するなど、かつてのように地域の行事ができるようになりました。団員数は減りましたが、このように何とか様々な団の活動を維持できています。

「とみおか守り隊」は18名ぐらいいます。700～800人ぐらいの町民が帰還しているので（2018年秋現在）、そういう方々に声をかけたりもしています。そうすると町民も安心してくれます。また「婦人消防隊」も同数ぐらいいます。女性たちが仮設住宅を回ると非常に反応が良かったりで、そういう活動も大きいです。



地域にどんな人がいるか知っているのは、何といても消防団員です。その役割をこれからも果たしていきます。そして町が将来へと発展していくように、消防団の立場でできることを、これからもやっていきます。

(2018.9.28\_談)



出初め式での分列行進 (2018年1月17日)

## Milestone 2014

# 第24回 全国消防操法大会 小型ポンプ操法の部に出場

2014年8月24日に福島市の県消防学校で開かれた「第39回福島県消防操法大会小型ポンプ操法の部」で優勝した富岡町消防団は、福島県代表として「第24回全国消防操法大会小型ポンプ操法の部」(2014年11月8日・東京都江東区有明の東京臨海広域防災公園で開催)に出場。24県出場の17番目に登場して、富岡消防団伝統の技を披露した。

### 現場到着から放水するまでの 速さや行動を競う



安藤 治さん  
(当時 富岡町消防団長)



阿部 祥久さん  
(操法大会 指揮者)

**安藤** 2014(平成26)年11月、震災後に初めて全国大会に出場しました。私たちの団のポンプ操法には歴史と伝統があって、この年で全国大会出場は4回目です。2010(平成22)年に県大会準優勝、そして2012年に準優勝旗の返還があったのですが、その時に双葉支部が大会に参加できない状況を寂しく思いました。それで帰ってきて阿部君に「操法やらないかい?」と声をかけたんです。阿部君は大会の予選経験者でした。

**阿部** 団長からお話があり、私も出場への思いがあったので、「しっかりやらせて頂きます」と話を受けさせて頂きました。

**安藤** 町長は昔消防団にいて、ポンプ操法の経験者。平成25年の町長就任の際、挨拶に行ったところ、開口一番に「ポンプ操法はどうするんだ」と言われました。町長のお墨付きでスタートした感じです。

**阿部** 各団員の避難状況から、選手はすべて役場職員で固まりました。訓練は、郡山市にご協力をいただき、市内の練習会場をお借りして実施することができましたが、夜間照明等がないため、毎朝5時から開始し、早朝訓練を4月から11月まで実施しました。

**安藤** 選手が一生懸命訓練している姿を、町広報の応援職員が、動画配信や町のフェイスブックなど、インターネット上に配信してくれました。これはかなりの反響がありま

した。選手たちは「頑張れ」の声をいただいて、さらに訓練に励みました。

**阿部** あの当時、町のフェイスブックで「いいね」の数が増えなかった数字だったことを覚えています。国や県の職員からも応援の言葉をいただき、我々もその気持ちに応えなくてはという気持ちになりました。

**安藤** 「感謝を込めて一線延長」という横断幕を全国大会に持って行きました。これまで応援やサポートをいただいたすべての方々に対しての、感謝を込めたメッセージです。

**阿部** 大会本番では実力を出し切れず、入賞できませんでした。でも、それが全国大会です。とにかく最後まで操法をしっかりとやる、という思いで、最後まで出来たというのは良かったです。ただこれだけ支援や応援をしてもらって、結果を持ち帰れなかったのは悔しいです。やはり伝統というもののはつながなくてはいけないと思うので、この悔しさを次のメンバーに伝えていきたいと思います。

**安藤** 私は結果だけでなく、過程が大事だと思っています。選手はもちろん、周りのサポートや応援も含めてチームが一つになったので、26年のチームはそういう意味では最高だったと思っています。

**阿部** 今まで町内6分団の中の優れたチームが代表となり、上の大会に進んでいきました。しかしこの年は6分団からの選抜で出場しました。「全分団が一つになる」ということが大きな収穫だったと思っています。

**安藤** 町に人が帰ってくる施策というのは行政がやってくれる。人が生活するようになると、人と地域をつなぐ消防団の役割はますます大きくなります。これからも「つなぐ、支える」消防団活動を続けていきたいですね。

(2018.10.2\_談)



感謝を込めて一線延長

